

2020年3月27日

地域課題解決プロジェクト

～報告書～

伊勢市神社地区における 避難所運営マニュアル策定 への取組について

みえ防災・減災センター 連携研究員
竹内 智一

第1章 取組の意義

1. 避難所運営マニュアル策定における、伊勢市の現状

(1) 現状

プロジェクト開始当初は要支援者リストに対する取組みを行う予定であった。しかし伊勢市においては福祉部局が単独で管理を行っていること、危機管理課として防災への取組に要支援者をメインに据える段階ではなく学区単位での避難所運営マニュアル策定を完了させることを急務として捉えていたことから、本取組みにおいては神社（かみやしろ）地区において避難所運営マニュアルを策定することを目標とした。

(2) 伊勢市における避難所運営マニュアル取組状況

伊勢市では小学校区単位で 23 に分けられた「まちづくり協議会」ごとの避難所運営マニュアル策定を目標としており、平成 29 年度まででは厚生地区・浜郷地区の 2 力所の策定に留まっている。市では平成 30 年度を初年度とする「第3次伊勢市総合計画」防災施策基本方針に位置付けている。

2. 目指すべき方向

大規模災害時の住民主体の避難所運営を目標とし、そのために必要なマニュアル整備と取組を通じた地域の防災意識向上を行う。マニュアルは常に気づきからの修正・改善を加え、内容を追加していくものとする。

3. 地域防災課題解決プロジェクトとしての取組方針

神社地区は平成 28 年にも避難所運営マニュアル策定に向けた取り組みを行っていたが、策定前に頓挫してしまった経緯がある。なぜ策定の動きが止まってしまったのか理由を明確にし、ボトルネックに合わせた支援を行う。また再度地域に防災意識を向上させる活動プロセスを構築することを成果とする。

具体的な活動としては、神社まちづくり協議会の活動推進組織である「安心して住めるまちづくり委員会（以下、安心委員会）」へのアプローチを軸とし活動を行った。理由として、1つは自治会主体の自主防災組織が名簿だけの形式的なものであり、実質的に安心委員会しか防災の先導ができないこと、もう1つは安心委員会の中に自治区長や施設管理者である神社小学校の校長先生など防災活動における役割者がほぼ揃っている事があげられる。この安心委員会の月 1 回の集会を意見の集約と共有の場とし、防災活動の推進支援を行うこととした。

第2章 計画作成・実施内容

1. 取組みの全体概要

(1) プロジェクト取組方法の形式

前述の通り、神社地区まちづくり協議会には3つの委員会があり、その中の安心委員会へのアプローチを基本とした。安心委員会は毎月第3木曜日の19時から定期的な集会を行っており、その場で防災への取組を推進することとした。この委員会の中でワークショップを重ね、防災に対する地域ルールを確立した。決め事が進めばまちづくり協議会の全委員に声掛けをし、まちづくり協議会全体での情報共有を行った。防災訓練においても住民主体を基本とし、多くの地域住民に運営側の役割を担ってもらい実施した。令和元年度については若年層への地域活動への参加を促す一環として、神社小学校の4~6年生に対してアプローチを行い、地域の繋がり強化に取り組んだ。

(2) コンセプト

神社まちづくり協議会の神生会長から「班分けや役割を与えて誰も動かない。君は、これを、いつまでにやって。と1から10まで指示しないと動かない。」との意向により「一目で見て何をすれば良いのか分かるマニュアルシート作り」を基本コンセプトとした。

通常避難所運営マニュアルを手掛ける際、役員が入れ替わらない1年間で他の地区を模倣してある程度のものを作ることが多いのが現状である。マニュアルを作るだけなら穴埋めにすれば簡単だが、マニュアルの読み込みや考えをもった避難所運営を前提とするよりも「今これをやってくれ」と指示文書に近い形で渡せるマニュアルを目標イメージとした。地域の想いを込めた魂のあるマニュアルとするため、修正・訓練・グループワークを繰り返して1つずつ肉付けをしていくスタイルとした。まず取組初年度は簡単な時系列に沿った「やるべき項目」を列挙したシートを作り、そこに加筆していく形でマニュアルの形を整えていくこととした。

(3) 取組スケジュール

平成30年度当初予定と実際の動きを比較した表を示す。地域住民の意識の醸成や地域企業との調整で訓練日が大きく変わったためスケジュールとは違う流れになった部分がある。また防災以外の地域イベントについても、まち協全体での委員負荷には当然なるため、夏祭りや正月の門松つくりの準備などが重なる時期には動きが鈍くなるため、当初予定よりも時間をかけて理解を得るようにした。

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
当初予定	趣旨説明 川口先生 HUG	しごと 洗出し	関係者 打合せ	班編成	防災訓練	反省会				
<hr/>										
実際	6/21 安心委員会 趣旨説明	7/19 安心委員会 講演会準備	8/18 川口先生 キックオフ講演 会+WS	9/10 防災通信全戸配布 9/20 安心委員会 マニュアル項目の 選定	10/18 安心委員会 避難所レイアウト WS	11/15 まち協全体会議 ・食事と物資WS ・訓練打合せ ・避難所職員参加	12/20 安心委員会 ・避難者名簿WS ・訓練打合せ ・避難所職員参加	1/17 まち協全体会議 ・避難訓練打合せ ・ルール決め ・避難所職員参加	2/17 防災訓練 2/21 まち協全体会議 訓練反省会	3/ 安心委員会 来年度取組方針 と目標の共有

令和元年度は反省を活かして4月からすぐに取組が始まられるよう、来年度への引継事項まで反省会の中で検討していたが、結局は地域の総会や役員・委員の選定が定まらず6月までは身動きが取れない状態になった。このあたりは自身の知識のなさが原因であり、地域のシステムとして手の入れようがない問題点であったと思う。

2. 取組地区について

(1) 取組地区の選定

第一章記載の通り、平成28年度にマニュアル策定の動きが止まってしまった理由を明確にし、それに対する最適なアプローチを模索する為に神社地区を選定した。

平成30年6月15日に初めて神生会長と打合せをした際に率直な考えを聞いたが、実際にまちづくり協議会として策定の希望はあり、地域住民の意識の低さや役員の交代が原因との考えだった。ただ私の印象として、行政と地域の足並みが揃っていない状態でグループワークを進めたことが原因の一つになっているように感じた。

(2) 神社地区の概要

人口：6,139人（男性：3,004人、女性3,135人）

世帯数：2,741世帯

高齢者比率：21.8%（65歳以上が6,316人中1,379人）

伊勢市全体は29%

地理的条件：神社地区は、神社港、竹ヶ鼻、小木、馬瀬、下野の5つの町の集合体で旧度会郡神社町がもとになっています。当地域は海に近く海拔の低い地域であり、憂慮されている大震災に対処する見地からも住民相互の結びつきが重要課題となっています。
(神社地区まちづくり協議会HPより)

ハザード：津波被害が想定される地域であり、津波避難への意識は高い。その一方、津波が来たら準備しても無駄という感覚から思考停止している面も多く、地震＝津波という感覚が1つの課題になっている。宮川の洪水ハザードエリアにも指定されている。

3. 平成 30 年度における、具体的な取組内容

(1) 安心・安全委員会での取組内容

平成 30 年 5 月 9 日より神社まちづくり協議会へアプローチを開始し、具体的な活動は 6 月の委員会への参加からとなる。本プロジェクトではプロセスに重点を置くため、委員会の方針が軌道に乗るまでの 1 年目については各月の委員会での活動だけでなく、週に 1 回程度行っていた当日までの準備・打合せについても簡単に記載した（特に記載のないものは、神社まちづくり協議会での打合せとする）。

またコアメンバーとは、まちづくり協議会会長、安心委員会委員長、事務局長の 3 名を指す。

＜平成 30 年＞

5 月 9 日：伊勢市から神社地区まちづくり協議会へ避難所運営マニュアル策定打診

5 月 18 日：神社地区での取組が決定。

6 月 15 日：まちづくり協議会と初打合せ。会長の意向を感じている課題点を聞き取り。今年度の最終目標を「1 枚ペラで仕事が分かるマニュアルシート」とした。

6月21日 第1回安心して住めるまちづくり委員会

概要：これまでの取組みの留直し
今後の方針とスケジュールの確認

ねらい：事業が止まってしまっている事の再認識。

マニュアル作成に向けた意思統一。

神社地区の立ち位置と現状を認識してもらうため、これまでの防災活動の留直しを実施した。メンバーがマニュアル作成の必要性を感じ、主体的に活動できるようになるため、昨今の災害と避難所状況についての説明を行った。

また、委員の入れ替わりによる意識低下が課題となっているようで、防止策を検討する必要がある。新規メンバーが多い事を考慮し、HUG や講演の再要望があれば検討していくこととした。

6 月 25 日：神生会長と相談し HUG と基調講演を川口先生に依頼していくこととした。

6 月 28 日：川口先生と相談し、HUG ではなく講演とグループワークで地域の意識醸成を優先することとした。

7 月 4 日：まち協に HUG からの内容変更を相談。川口先生がおっしゃるなら了承。HUGへの意欲が高い地区には個別で相談してもらうよう呼び掛けることにした。また季節を考えクーラーの設置してある会場を要望し、体育館から工作室への変更を行った。

7月19日 第2回安心して住めるまちづくり委員会

概要：キックオフ講演会の内容説明

ねらい：委員メンバーが住民と同じ参加者とならないよう、主催者としての意識を持たせる。

委員が住民を先導して積極的な討議となるよう、主催者である自覚を持って参加してもらうよう話をした。

7月23日：まちづくり協議会の名簿を取得。西井事務局長が来年で役員を降りるつもりとの情報を得る。

8月 2日：川口先生とキックオフ講演会について相談。ワークに十分な時間を取りたいので、発表はさせず参加者から出た意見を並べて、先生が講評しながら中身に触れて頂くことにした。

8月 3日：講演会にテレビとラジオの取材が入りたいとのことで、神生会長に相談。問題ないとのこと。また校長先生に当日マイクとスクリーンの準備を依頼。

8月 9日：神社小学校工作室の下見を実施。備品や会場作りについて校長先生と相談。校長先生とじっくり防災について話す時間も頂け、神社小学校として児童と取り組んでいる事や、指定避難所の管理者としての意見も聞くことができた。

8月18日 神社地区キックオフ講演会

概要：第1部、川口先生より防災講演会

第2部、ミニグループワーク

議題①防災活動において、できること

議題②防災活動において、やっておいた方が良いと思うこと

議題③防災における、不安に思うこと



基調講演の様子



グループワークでの意見を共有

ねらい：神社地区住民の防災意識向上

ワーク参加者が積極的で、防災に対する雰囲気は良かった。反省点として「まずは命を守る、つなぐ」事に主眼を置いたため、自助に意識が偏ったように思う。共助に対して考える仕掛けが必要だった。「不安に思うこと」の後に「不安

を取り除くために行うこと」のワークを1つ増やすと共に助へ大きく意識が動いたのではないか、と川口先生からアドバイスを頂いた。

また、講演で出たテーマではないのに要支援者への不安を訴える意見が多く地域課題となり得る事が分かった。

参加者：地区住民53名

8月22日：コアメンバーに講演会の反響を聞き取り。参加者の積極的な姿勢から意識の高まりを感じてもらえたようだった。住民へのフィードバックとして全戸配布の広報を提案。

マニュアル作成にあたり各関係者との打ち合わせを提案したが、民生委員や施設管理者などまちづくり協議会メンバーに揃っていたため、安心委員会に避難所担当職員を呼ぶ形で今後は進めいく事にした。

8月29日：全戸配布を行う「ぼうさい通信」の打合せを実施。

8月30日：川口先生に「ぼうさい通信」内容の確認を行う。

9月 5日：「ぼうさい通信」の提供。せっかく取り組んでいるのだから「みえの防災大賞」にいつか応募しようと目標設定を行う。10月18日の委員会に竹内が出席できないため、できるだけ事前準備ができるよう意見出しを宿題形式としてワークを進める事とした。

9月11日：川口先生にマニュアル作成の進め方について相談。宿題で好きなように意見を出し、まず作ったマニュアルをHUGで検討するのは面白い取組とのこと。

9月12日：コアメンバーに宿題とHUG実施の提案。委員会運営もセンター主体から少しずつ委員主体にしていきたい旨の相談。

9月20日 第3回安心して住めるまちづくり委員会

概要：キックオフ講演会振り返りと全戸配布の依頼

避難所の基本・安全なレイアウトについてのDVD鑑賞

マニュアル記載項目の宿題実施

ねらい：講演会を終え、再度マニュアルを作っていく意義を留直し。

DVDを通じて実際の避難所がどうなるのか知る

マニュアル記載項目を委員メンバー内で検討させる

避難所に対するイメージがバラバラで、委員間で共通言語になっていない。マニュアルを策定するにあたり統一したイメージの避難所を想定して欲しかったため、映像を使って神社がどうなるかを考えもらった。やらされ感だけが

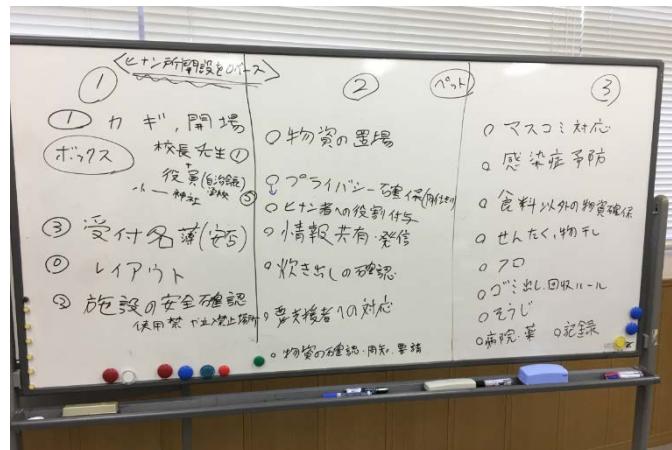
残らぬよう主体的に取り組ませるため、我が事としてもらうことを目標として実施した。

9月28日：まち協に宿題の回収状況を確認。全く集まっていないところで、発破をかけてもらうよう依頼。

10月12日：コアメンバーと打合せ。宿題から多くの意見が出たが、選別はせずに全てマニュアル記載項目として落とし込んでみる事とした。また何を検討するにしてもレイアウトを先に決める必要があるとの意見が出た。

同日、伊勢市を訪問。現状でHUGをやる意義が見いだせない、10月の委員会でやる事が見えてこないといった指摘を受けプロジェクトメンバーも同様だったため方針を急遽変更。避難所レイアウトについてのグループワークを行うこととした。

＜マニュアル項目検討＞
委員からの意見を
時系列ごとに集約した



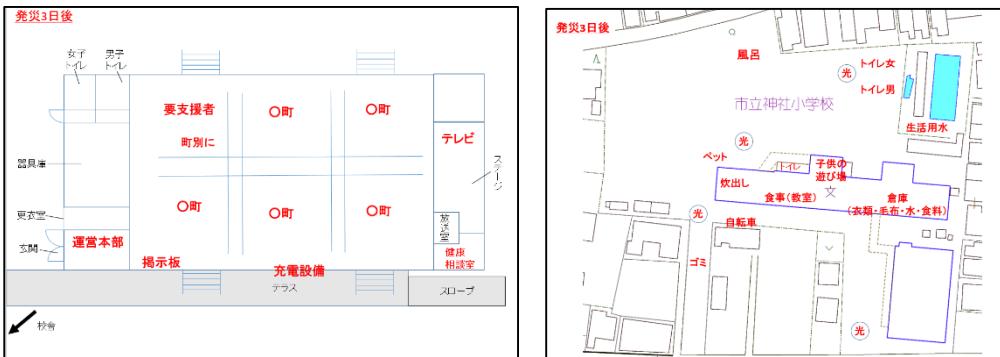
10月18日 第4回安心して住めるまちづくり委員会

概要：宿題をマニュアルシートに落とし込んだものを共有
神社小学校の避難所運営レイアウトを検討

ねらい：意見がマニュアルに反映されたことを受け、主体性を持たせる。
レイアウトについて検討する。

レイアウト検討を発災直後と、発災3日後のグループに分けて討議を行ったもらったが、検討する際に人の動き・物の動きなど検討項目を具体的に指定しなかったため、グループで考える項目が分かれてしまった。検討してもらう項目（物資の保管場所・運営本部の場所など）はある程度指定して検討してもら

うべきであった。



10月22日：伊勢市役所にて京都大学の竹之内准教授に訓練の方針について相談。委員だけが忙しい訓練ではなく集まった住民全員が参加できる仕掛けが必要とのアドバイスを受ける。

10月26日：コアメンバーと2月の訓練について打合せ。去年1次避難の訓練は行っているため、今年は避難所をテーマとした。
また住民に参加意識を持ってもらうため避難所体験ブースの企画を説明。住民から住民に対して情報を伝えていく仕掛けについて了承を得た。

11月12日：防災会議の打合せ。調整やルール作りは安心委員会で行い、住民全員で取り組む訓練のようなイベントやマニュアル策定において決定事項を周知する際には委員会全体に参加を募るという事になった。

このタイミングで神生会長よりマニュアルを本の形式で作りたいとの相談を受ける。事業趣旨とズレるのでプロジェクトとしては作らないが、協力はするので取り組んでみてはどうかと提案

11月13日：伊賀市柘植地区への先進地視察に同行。

11月15日 第1回神社地区防災会議

概要：全委員会に声をかけ、これまでに決めた事を共有する。

避難所レイアウトのギャップを埋めるグループワーク

2月防災訓練内容の提案

ねらい：安心委員会の取組みから、神社地区全体の取組へとシフトする。
避難所職員も会議に参加させ、顔の見える関係を作る。

安心委員会だけでなくまちづくり協議会全体の役員に声をかけ、防災会議を

実施した。市役所からも避難所担当職員（神社小学校担当職員と災害対策本部の避難所担当職員）を同席させ、地域に向けて行政目線での動きを報告させた。

また、前回レイアウトについて2班で意見の分かれた食事・物資置場について擦り合わせを行い、ギャップを埋め、ひとまずの仮置きで地区としての意見をまとめた。安心委員以外から初動期対応にトイレ関係の記載がないとの指摘を受け、やはり広く意見を募る事で漏れの無い対応に繋がる事が共有できた。多くの意見を受けてマニュアルに肉付け・改訂を行っていく仕掛けと時期を決めていく必要がある。



避難所担当職員から避難所開設時の動きを説明

11月28日：コアメンバーと打合せ。分厚い本にしたマニュアルはやはり読まれないと認識を確認。会長はマニュアルの成果物を全戸配布したいとの想いがあり、1枚ペラと本の間の「マニュアル用マニュアル（簡単な見出しと詳しい内容が本マニュアルの何ページに載っているかを記載するもの）」を作り、それを全戸配布していくイメージの統一を行った。

防災訓練の広報や役割に対しての意見交換を実施。

12月5日：コアメンバーと神社小学校の地震解錠Boxと防災倉庫を確認。

12月7日：事務局長と打合せ。簡易受付名簿の中身を検討。訓練の反省会について当日開催は抵抗が大きく、せめて1週間以内に開催できるよう依頼した。

12月10日：コアメンバーにブース原稿のチェックを依頼。

12月14日：コアメンバーと委員会の打合せ。訓練の役割分担も事前作成。

12月17日：事務局長に電話連絡。訓練時住民アンケート内容の決定。

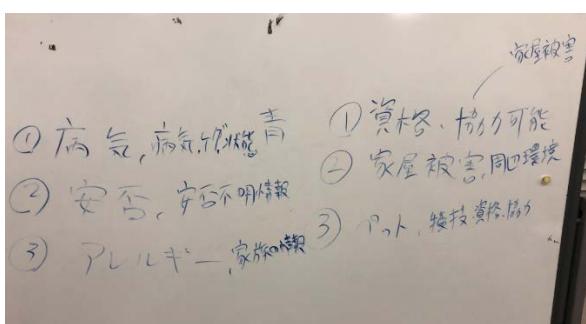
12月20日：川口ゼミにて体験ブースの運用方法について相談。体育館の中と外で参加者を分散させるべきとの意見を頂く。

12月20日 第5回安心して住めるまちづくり委員会

概要：名簿に関するグループワーク
防災訓練の役割分担決め

ねらい：避難所運営で使う名簿（避難者カード）を検討する。
訓練で主体性をもつため委員全員に役割を充てる。

前回に引き続き避難所担当職員をグループに加えて、災害時の避難者名簿についての検討を行った。グループワーク前に平時と災害時の名簿の活用方法など説明の時間は確保したが、避難者カードの記載タイミングなど細かい部分が統一できていなかった。細かい部分は考えず神社の名簿に必要な項目を検討したが、今後改修の必要は残った。



避難時に集約したい情報の優先度を検討



グループワークの様子

1月7日：避難者カードのたたき台を共有。川口先生の意見を伝え、体験ベースを屋内と屋外に分けて実施する方針の決定。

1月16日：訓練当日の流れと必要資材について確認。

1月21日：伊勢市防災センターにてダンボールベッド等資機材の視察。

1月24日 第2回神社地区防災会議

概要：2月訓練のリハーサル（役割の練習）

ねらい：訓練時に混乱が生じないように自身の役割を明確にする。

一通りの練習を行い当日の流れを確認できた。しかし、課題出しや改善の方向までは意識が向かず確認作業だけになってしまった。



2月 1日：神社小学校にて校長先生と打合せ。エアーストレッチャーと地震解錠Box、外付け階段の確認を実施。

振り返りワークショップ内容と3月の全戸配布アンケートの共有
2月 13日：体験ブース資材の搬入。ハンドマイクなど備品のチェック。

2月 15日：備品の体育館への搬入。

2月 16日：会場設営、全体リハーサル

2月17日 平成30年度 神社地区5ヶ町合同防災訓練

日時：2月17日（日） 9:00～ 神社小学校にて実施。

訓練目的：レイアウトに沿って避難者を誘導できるようになる
避難所を知って・体験する

見どころ：5ヶ町の住民が1カ所に集まって、初めての防災訓練
(2007年に合同消火訓練は実施していたが、防災訓練は初)
委員会で定めたマニュアルレイアウトに沿って実施する
住民が住民に向けて運営する、住民主体の訓練

内容	：	9時00分	神社小学校グラウンド 集合
		同時刻	施設安全確認実施
		9時15分	受付訓練・収容訓練開始
		10時00分	避難所ミニ体験（約15分×4ブース） ①避難所スペース・ダンボールベッド体験 ②簡易トイレ体験 ③外付け階段・地震解錠Box体験 ④防災倉庫・簡易担架体験
		11時00分	講評
		11時30分	炊出し

訓練は2部構成となっており、前半は住民が避難所に集まってから体育館に受け入れるまで、特に安心委員会で検討してきた初動期対応の訓練を実施した。後半は住民意識向上を目的とし、避難所がどういった所か知るための体験ブースを設置した。

前半の訓練について、施設安全確認はプロジェクトより山下が支援に入り実施した。地域の他のイベントではまず行うことのない作業のため、専門家がサポートに入ってもらうのは心強く、必要なことであったと感じた。受付は委員がやるよりも地域で一番顔の広い人を各町で選出してもらい、委員から協力依頼をするようにした。当日トラブルとして受付予定位置に住民が車を停めており、分かりにくい形になっていたが大きな混乱は起らなかった。この部分は委員が手厚く誘導に回れ、よく知っている人が受付にいるという安心感が功を奏した結果かもしれない。収容訓練についても各町の旗を収容場所に掲げることで、混乱なく集まる事が出来ていた。



受付の様子



収容時の様子

後半は安心委員メンバーが中心となって避難所体験ブースを運営した。①避難所におけるスペースやダンボールベッドについて、②災害時のトイレについて、③地震解錠 Box と外付け階段について、④防災倉庫と簡易担架について、の4ブースを設置した（当日の会場トラブルの影響で防災倉庫と簡易担架は抱き合いで1つのブースとし、各ブース体験時間を15分に変更した）。参加者に体験してもらう・協力してもらう所では想定していた通りの動きにはならない事も多く、運営側も「どうしたら良かったか、次はこうしてみよう」と回を重ねるたびに自然に改良を重ねていた。川口先生からも「人に教えるには、まず自分に落とし込んで消化してからでないと納得してもらえない。運営側も最初と最後では全く違うものになっており成長がみられた」との講評があった。



避難所スペース体験



簡易トイレ体験



外付け階段・自動解錠Box



簡易担架・防災倉庫

課題　：事前の練習（想定）を充実させ、参加者には一定のレベルを維持して体験ブースでの説明を受けられるよう準備する必要があった。説明文も根本的に知りたい情報やそもそも 5 町全員が神社小学校に集まると思っている人もおり、体験前に少し前提条件を全員で共有しておく必要もあったと思う。来年度への検討課題としたい。

参加者：神社地区住民 243 名

2月 18 日：コアメンバーに感想聞き取り。資材の撤収。反省会打合せ。
反省会に自主防災隊の参加を依頼。

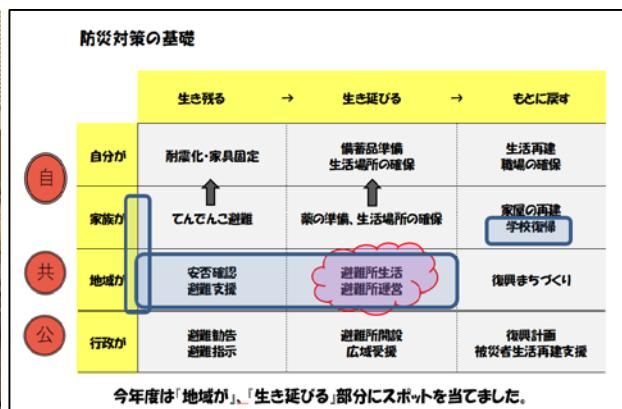
2月 21 日 第7回安心して住めるまちづくり委員会

概要　：防災訓練のふり返り・反省会

ねらい：訓練での気づきを基にマニュアルに肉付けしていく項目の検討、さらに川口先生に評価を頂くことで整理された情報を安心委員メンバーに落とし込む。

課題を考えると風呂敷を広げすぎる所がある。ただるべき論を一度共有する事も大切で、「その中から今何をするか」を検討し整理をする必要がある。今どのフェーズを議論し、訓練のターゲットとしているのか立ち位置を理解して取組むように提案をしていく必要があると感じた。

訓練に参加していた自主防災隊のメンバーに声をかけたが 1 人も参加してもらえなかった。こちらも今後の課題であると感じた。



3月全戸配布アンケートを提供。3月10日までに回収すれば、次回28日の委員会で結果を共有できるが、卒業式などイベントも多く無理との回答であった。継続した取組の1つのツールであるので、今回は無理させず地域の意見を尊重することにした。

3月 8日：マニュアルの指示書を作れる人材を委員会の中で選定してもらうよう依頼。出口委員長ばかりが作る事にならないよう、業務分担を検討。2年前にマニュアルが止まった本当の理由、ボトルネックを聞き取り(後述)。

3月 25日：28日の委員会打合せを実施。3月で委員会を去るメンバーにも充実感と来年度も協力してくれる気持ちを持たせたいとのこと。1年間やってきた事の総まとめと、マニュアル項目を1つでも増やすことを目標とした。

3月28日 第8回安心して住めるまちづくり委員会

概要：平成30年度活動成果の確認

若年層・要支援者へのマニュアル項目検討
来年度スケジュール共有

ねらい：神社地区で優先したい項目として出た若手・子どもへの取組と要支援者への取組について検討。地域と足並みを揃える。

来年度の取組目標を具体的な活動にするために、若年層がないと避難所で困る事、要支援者がいる避難所で困る事について検討を実施した。総じて、若年層については避難所でお客さんにならないよう、常日頃から防災活動に参加してもらえるよう興味を持ってもらうこと、要支援者については事前の情報集約が大事であると意見となった。

(2) 神社地区からの意見（防災訓練時アンケートより）

防災訓練当日に、体験ブースの評価と、今後の防災活動や訓練への意見を記載いただくアンケートを実施した。（添付資料：訓練アンケート結果を参照）夜間訓練や夏場の訓練を望む声もあり、来年度からの訓練の参考となった。

(3) 2年前のボトルネックについて

2年前にマニュアル策定が止まってしまったボトルネックについて1年間の関係性を経てコアメンバーから話が聞けた。H24 まちづくり協議会発足当初から神生会長（当時は竹ヶ鼻の自治会長として参加）は防災の取組を行いたかったが、当時の委員会は防災への意識がなく防犯にばかり目が向いていた。当時役員にいた元市役所職員や市議会議員も防災に反対の姿勢をしていたため、大きな動きができずにいた。4年ほど防犯の活動だけを行う中、H28年に青パトでの活動が失敗し意気消沈している所に、まちづくり協議会会長となった神生さんが防災に目を向けていくよう提案。防災活動がスタートした。ただ当時の委員は防災に対する意識が低く、取り組む必要性すら感じていなかった。そんな中、伊勢市の危機管理課が避難所運営マニュアル策定支援に入ったが委員は及び腰で、とても継続できる状態ではなかった。もっと意識の醸成が必要を感じ、H29はイメージのつく避難行動を5ヶ町で訓練する事とした。

以上が、コアメンバーが感じているボトルネックの正体であった。これが全てではないかもしれないが、納得のいく理由ではある。昨年の台風第21号で伊勢市は大きな被害があり、今年度も災害の多い1年だったため、委員の意識も高くここまで活動継続ができたのかもしれない。今回の教訓としては、「防災を知り、正しい手順を踏んだとしても、それが地域の歩幅に合うとは限らない」という事だと思う。

(4) 平成30年度の活動をふり返って

1年目で作成したマニュアルは全体業務をフェーズごとに思いつくまま並べたものであり、それだけで避難所運営が行えるレベルにはほど遠い。訓練を通じて感じた課題や新たな気づきをマニュアルに追加・修正していくことで初めてマニュアルとしての形を成していくものである。

本取組においては活動がストップしてしまうと何の利用価値もないペーパーが1枚残るリスクを内包する代わりに、常に加筆修正を加えなければ全ての活動が無駄になるといった、ある意味地域に対してPDCAを強制する姿勢をとつ

ている。長期的な目線に立ち「行政の手がどこまで入っていれば活動が継続できるのか」を検討し、「最初に形だけでもマニュアルを作りきってしまう」よりも身になる成果が得られれば本取組みの意義となる。

2年目の活動としては、訓練を行ってみての気づきをマニュアルに落とし込み、項目の追加を行う。地域だけで対応する必要がある初動期の項目を手厚くし、初動期マニュアルの充実を図る。また、今年度検討した項目については具体的な指南書を作り、マニュアルシートと一緒に渡すことで避難者にも何をすればよいのか、これからどんな仕事が必要となるのか、が分かるマニュアル作りを進める。

マニュアル追加項目として、訓練通り返りの中で神社地区の優先取組事項に若者（子ども）の防災活動への参加促進と、要支援者への取組があげられた。20～30代の参加を促すためにも子どもへの取組は重要となるので、理解のある小嶋校長と協力して学校行事への関りを推進する。要支援者については住民台帳を竹ヶ鼻町・小木町では以前作成しているので、防災に役立つ形で更新を検討する。実際の要支援者個別の対応は町よりも小さな単位で行う必要があるので、まちづくり協議会としては、地区内でどこに避難しても当事者情報が共有しやすくなる統一フォーマットの作成を目指す。

4. 令和元年度における、具体的な取組内容

(1) 安心・安全委員会での取組内容（令和元年度）

コアメンバーと去年からの引継課題を中心に早速安心委員会を開催しようと提案するも、5つの町によって3月までが任期の委員と5月の総会までが任期の委員が混在しており、4月から新旧委員混ざっての委員会開催は現実的ではないとの事だった。それでも取組は続けたかったが、委員の足並みを揃えて活動すべきとの話でまとまり、今年も安心委員会は6月から開催することになった（事務局長も新しくなり、コアメンバーにしっかり防災の意識付けをしてから会を進めたほうがよいとの一面もあった）。こういった地域の活動ができない期間は、せっかく盛り上がっていた防災意識がどんどん低下してしまう。この期間に何をするかは重要なポイントであると捉え、6月までの間に4月の役員会で今年度の取組方針を話す時間をもらうこと、5月の総会でも防災の時間を必ず作ること、コアメンバーを中心に神社小学校との取組を6月までに段取りをつけるようアプローチしていくこと、を約束し今年度の活動をスタートした。

令和元年度については意思決定までのプロセスは前年度を踏襲する形で行った。基本的な流れは「①委員会で意見を集約する、②出た意見をもとに資料作成、③コアメンバーと共有し、イメージのズレを修正、④安心委員会の中で共有、委員の承認を取る」この繰り返しだ。このプロセスが特にコアメンバーとの間では確立されており、昨年度とは違い手探りで進めていった部分は無くなたため、細かい打合せの記述は省略する。今年度については手数の省略（負担軽減）もプロジェクトの課題としていたため、毎回訪問するのではなくメールや電話を使って資料のやり取りを行った。特に問題もなく意思疎通はできたが、最終的なイメージのズレを確認する際には、やはり顔を合わせての意見交換が必要かと思われた。というのも、今後の防災取組の方針を話し合っている中で地域の本質的な課題やコアメンバーの想いといったものが意図せず顔を出すことがあり、現実的に解決すべき課題や地域に合ったアプローチへのヒントはその中に隠れているように感じる。少なくとも全体の会以外にコアメンバーと定期的に話す時間を持つ事は防災活動を推進する上で重要なファクターになると思う。

2年目の活動については、取組の中心となった子どもとの関りと委員会活動との関係性に補足を加えて記述する。またコアメンバーとは神生会長・出口委員長・田中事務局長の3名を指す。

(2) 神社小学校との取組みについて

H30年度に安心委員会で来年度テーマとした、「防災に関わる人材の増加、その中でも若年層へ参加を促す取組み」として神社小学校と足並みを揃えて防災活動を行っていく提案をした。地域の狙いとしては児童を通じて、その保護者に防災活動をアピールできること、高齢化が進む中で子どもたちが有事の際に地域力として活躍してもらうよう知識・経験を蓄積することがあげられた。学校側としても地域の大人と子どもの関わりが希薄になる中で、顔の見える関係づくりは非常に有効との判断をして頂き、まち協と小学校が手を組んでの防災活動が始まった。

当初の予定としては安心委員会委員が高学年に指導をし、高学年が低学年に防災授業を行うという企画を考えた。しかし土曜授業は長期休暇前後に設定されていたこともあり準備期間がないこと、一部の児童が中心になるのは学校側の考えとは違うことがあり、今年度については4~6年生に対して安心委員会で防災の授業・体験を行うこととなった。人数の問題もあり5年生には夏休み前のキャンプで、4・6年生については夏休み明けの土曜授業の中で防災の時間を作ることにした。内容はH30年度防災訓練で行った「体験」することを重視しながら、大人対象の場合と違い「避難所に避難する理由」から子どもたちが理解できるように学習の時間も確保するようにした。

小学校との取組①：神社小学校 5年生キャンプ

神社小学校 5年生のデイキャンプに参加し、午後から夕食までを防災キャンプと位置づけた。内容は具体的な活動報告の7月19日を参照。

小学校との取組②：神社小学校4・6年生土曜授業

神社小学校での土曜授業に参加し、4年生と6年生を対象に防災体験授業を実施した。内容は具体的な活動報告の8月31日を参照。

<令和元年度>

4月初旬

神社小学校に対して土曜授業の枠を防災に使えないか提案したところ、校長先生より5年生を対象としたディキャンプへの参加の提案を頂いた。学校側としてはどちらも可能ということで、両方とも実施する方向で企画を進めることとした。

取組内容を考慮し、

4月時点で作成したスケジュール →

スケジュール案			
マニュアル	防災訓練	子供	住民台帳(できるところまで)
4月			役員会にて今年度の取組紹介
5月			第1回 安心委員会 今年度の取組検討
6月		1日 : キックオフ集会+クロスロードゲーム (川口先生)	
7月	初動会内調査の監督	子供市の体験授業	住民台帳の利用法、必要な情報収集
8月		19日 : 5年生キャンプ	第一フォームを作成
9月	要支援者割り定め必要な項目を追加	31日 : 十種投票	面談・他署・収集 (竹ヶ島町・小木町が先行?)
10月	計画内調査の終了	10月準備	
11月			防災訓練 (要支援者の避難+体制で学ぶ)
12月	訓練での気づきを項目追加		台帳の更新完了、これまでの開拓合流出しケジメ、判斷を含め個別課題のアサート(各課題担当の干渉検討)
1月			
2月			
3月			防災意識アンケートの実施(全戸)

4月22日 神社地区役員会

概要：平成30年度の活動報告

マニュアル作成の進捗報告

今後の方針とスケジュールの提案

ねらい：まちづくり協議会のメンバーとして防災活動への理解を深めてもらう。

まちづくり協議会全体で神社地区の立ち位置と現状の共有するため実施。今年度も小学校との取組や防災訓練といった大きなイベントの前には全体に声がけし、協力してもらいたい旨を伝えた。

5月16日 神社地区総会、第1回 安心して住めるまちづくり委員会

概要：マニュアル作成の進捗報告

今年度活動（若年層への取組と住民台帳の作成）について

今後の方針とスケジュールの提案

ねらい：安心委員会の新メンバーに向けて、去年の取組の流れと今年度の目標を共有する。

総会の後で、短時間であるが新メンバーのために昨年度の防災取組みの紹介と、今年度の活動方針について説明。日程も決まっているため小学校への取組が前面に出ているが、あくまで取組を通じてマニュアルの追加・修正を検討していくことの重要性を伝えた。

住民台帳作成について、会長は熱意があるものの、他の委員は必要性を感じていないように思えた。

5月下旬：小学校との打ち合わせの中で、5年生キャンプでは安心委員会が運営をするが、土曜授業では体験をした5年生が先生になって他の学年の生徒の前で先生をしてみるのはどうか、という提案を行った。しかし夏休みの関係で練習時間が取れない事などから学校側からの許可は得られなかった。また、安心委員会の中でも昨年から活動していた旧メンバーと新メンバーで、活動に対する温度差が大きい背景もあったため、コアメンバーと相談し、7月19日に実施する神社小学校での5年生キャンプでは基本的に旧メンバーを中心に、8月31日の土曜授業では新メンバーを中心に運営することとし、残りのメンバーでフォローしていく体制を取る事とした。

6月1日 神社地区キックオフ講演会

概要：神社地区住民を対象とした防災講演会

川口先生による基調講演（1時間）+クロスロード（1時間）

ねらい：共助をテーマとして、地域での取組意識を高める。

川口先生に「巨大災害に備える～地域で進める防災対策～」と題して基調講演を実施して頂いた。昨年の反省から、共助・避難に焦点を当てて最近の話題（特に避難情報のレベル表記）を織り交ぜてお話し頂いた。その後全戸配布を行ったアンケートのフィードバックを行い、後半戦のクロスロードゲームを実施した。



クロスロードゲームについては、参加者も真剣に取組み、一部ヒートアップする場面も見られるほどであった。ペットや要支援者への対応など、端的に課題意識が伝えられ、参加者からも考えなければいけない事がたくさんある、といった感想が得られた。

第2回安心委員会は6月27日に実施の予定だったが、田中事務局長から7月8日に変更したいとの依頼を受ける。地域事情の為了承したが、市役所の公共交通に関する地域への説明会と抱き合わせになつたため、予定していたグループワークの時間が取れなくなってしまった。本来であれば住民台帳に必要な項目の意見出しワークショップを行う予定だったが、見送らざるを得ない状況になった。

また、前述の通り小学校への取組についても上級生を先生にするのではなく安心委員会が児童に向けて話すことになったため、全体の進め方は安心委員会の中で検討することとし、学校側には担任の先生に児童の安全管理と誘導を協力依頼した。

7月8日 第2回 安心して住めるまちづくり委員会

概要：7月19日5年生キャンプの実施内容について

ねらい：5年生キャンプでの委員の役割を理解する。

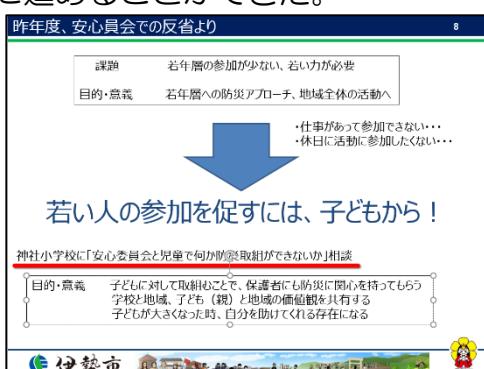
日程が迫っており検討時間が確保できなかつたため、5年生キャンプでの活動内容をコアメンバーとで決定するしかなかつた。そのため委員からすると我が事にならず、反対意見は無かったものの強制感があつたように感じる。

7月18日 第3回 安心して住めるまちづくり委員会

概要：7月19日5年生キャンプのリハーサル

ねらい：体験ブースの予行演習を行い、課題や不安な点を洗い出す

新メンバーの中には昨年の防災訓練に参加していない人もおり、雰囲気を知るためにも5年生キャンプは昨年からの委員を中心に、次回の土曜授業は新メンバーを中心に実施することとなつた。小学生向けに分かりやすい言葉に原稿修正をする際に、校長先生からアドバイスをして頂くことで悩むことなく効率的に進めることができた。



7月19日 神社小学校 5年生キャンプ

実施内容

- | | |
|-------|---|
| 14:00 | 防災授業（プチクロスロードクイズ） |
| 14:30 | 避難所体験授業（1ブース30分） <ul style="list-style-type: none">・避難スペース、ダンボールベッド設営体験・簡易組み立てトイレ、凝固剤体験・小学校にある担架の組立て、運搬体験 |
| 16:00 | アルファ化米を使ったカレー作り |

ねらい：児童への取組を通じて、子どもと大人で顔の見える関係を作る。
保護者に対して、地域の防災取組を知ってもらう。
子どもについて、マニュアルで検討しておくべき課題を体感する。

5年生の教室を使い、日常生活の中で防災学習を行うように意識した。防災授業ではクイズという形で避難について考えさせ、避難所になぜ行く必要があるのか、災害時の在宅・避難所生活はどう違うのかクイズ形式で児童の理解を促した。実際にはクロスロードを行っており、一人ひとりが避難すべきか、避難所に行くべきか、といった選択を検討させた。大人に対して経験がない分を埋める目的で実施したものだが、災害時のイメージ不足というよりも平時の生活を自宅に求めている児童が多いように感じた。やはり子どもの居場所を作ることと、基本的な生活リズムを平時と揃えることが児童の心のケアには重要ではないかと感じた。児童の真剣に取り組む姿勢から、問題なく体験授業に移行することができた。

体験ブースの運用についても問題なく実施でき、児童も積極的に体験をしてくれていた。多少考えなしに動く部分は当然あるが、そこが体験への積極性につながっており、運営側としても満足感の得られる時間になっていた。子どもの正直な意見も参考になる部分が多く、トイレの掃除当番や虫への対策など、まだ委員会で検討できていない課題についても質問される場面があった。委員の中からも避難所の検討をしていく際に子どもの意見を聞くのは良い事だ、という意見が出て、来年度以降、一緒に話し合える場が持てれば。といった話も出ていた。

問題点として、簡易担架の組立ての際に委員の1人が手を挟み出血するシーンがあった。大きなケガではなかったものの、最低限の安全管理を運営側ができなかつたことは反省点とし、委員会の中で今後は十分に注意するよう認識を改めた。



防災クイズ



簡易担架体験



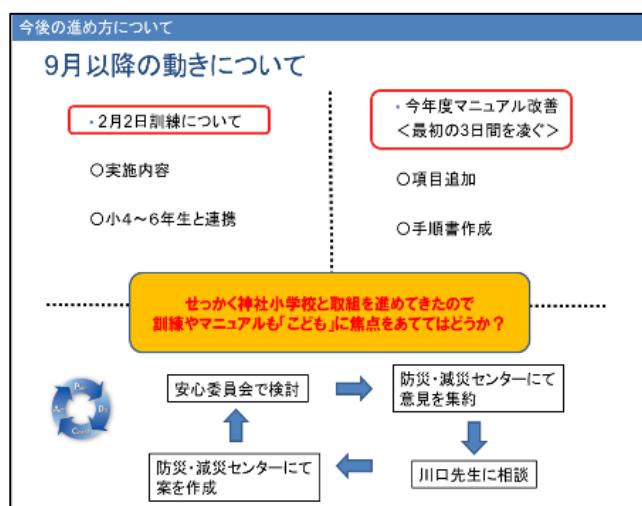
ダンボールベッド作り（スペース体験）



凝固剤体験（簡易トイレ）

5年生キャンプを終えて、コアメンバーとの打合せの中で、せっかく小学校と取り組んだのだから整備するマニュアルも子どもの事を大きく取り上げた方が良いのではないかという意見が出た。

そこで、これまでの課題の中に子どもへの視点を加えるのではなく子どもをテーマとしたマニュアル整備を行っていくこととした。



8月28日 第4回 安心して住めるまちづくり委員会

概要：今年度防災活動の目標再確認
4・6年生土曜授業のリハーサル

ねらい：小学校への取組が目的化していたので、あくまでマニュアルの追加・修正のための手段であることを再確認する。

体験ブースの運営には自信をついているものの、何のために活動しているのか忘れがちになるので、マニュアル作りを主眼に活動している事を留めなおした。また、せっかく小学校との取組を行ったため「子ども」に焦点を当てた訓練やマニュアル作りを今年度の具体的な目標として提案し、了承を得た。

8月31日 神社小学校 土曜授業

実施内容

8:45	防災クイズ	「みんなの学校が避難所になったら」
9:15	避難所体験	①スペース・ダンボールベッド ②簡易トイレ・凝固剤
10:15	避難訓練（学校メイン） 保護者への引き渡し訓練（学校メイン）	

ねらい：児童への取組を通じて、子どもと大人で顔の見える関係を作る。
保護者は授業参観として参加できるので、直接若い世代に向けて防災活動を知ってもらう。

防災クイズについては5年生キャンプの反省を受け、災害時におこる困りごと（ライフライン途絶など）についてイメージしやすいよう写真を多く使用し、被害写真についてもビフォーアフターを示して説明を行った。

新メンバーを中心に体験ブースを運用したが、特に問題なく運用することができた。安全管理の問題点として、児童がダンボールベッドから飛び降り下にいた生徒を蹴ってしまう事故があった。実験的に360度カメラを用いて撮影をしていたこともあり、物珍しさから児童をコントロールしきれなかった部分があつたと思う。

体験ブースの時間に参加される保護者は、想定と違い非常に少なかった。屋上への避難訓練から引き渡し訓練までの間、保護者は体育館で待機するため、

ダンボールベッドや凝固剤体験をしてもらうよう呼びかけたが、女性のグループや小さなお子さんいる家庭の方、そもそも防災への意識が高い保護者くらいしか体験をしてもらえなかった。委員からも、保護者と児童が一緒に体験してもらうような仕掛けが必要だったのでは、という声が聞かれた。興味をもつてもらえた保護者については丁寧な説明と子どもたちを守るための準備について説明でき、少しはあるが地域力の向上につながったと感じる。



防災クイズ



避難訓練の様子



避難スペース体験



ダンボールベッド体験



簡易トイレ体験



凝固剤体験

神社小学校との取組がひと段落し、2月の防災訓練に向けてスケジュールを提案した。

時間的に住民台帳作成に向けて話し合いを行う時間は無いと判断し、残りの時間はマニュアル作成と訓練の準備に充てることとした。



9月 19日 第5回 安心して住めるまちづくり委員会

概要：小学校との取組ふり返りワークショップ
マニュアルへの初動期項目追加について

ねらい：小学校との取組のふり返りから、子どもに期待することと配慮すべきことを整理してマニュアルに記載する。

子どもたちが積極的に体験してくれた事への達成感がある一方、そもそも目的であった若年層（保護者）へのアピールとしては弱かったのではないか、という意見が多くあった。より児童と保護者が一緒に動くことを考えると、高学年よりも低学年をターゲットとした活動の方が目的に合っていたという反省が得られたが、さらなる安全管理の必要性が課題となった。

10月 17日 第6回 安心して住めるまちづくり委員会

概要：子どもと避難所ワークショップ
トイレのレイアウト検討

ねらい：子どもに対して避難所運営の観点から手伝って欲しいこと、配慮すべきことについて整理した。また簡易組立トイレについて検討すべき課題について意見出しを行った。

大きく分けて子どもの生活を平時に近づけるための遊び場や学習室の設置と、高齢者への声掛けや物資の配給などの手伝いをお願いしたいという2つの意見が出た。また、トイレについては細かい検討ができるおらず、簡易組立トイレの設置場所や、凝固剤をどこで管理し、どう配布するかを検討した。委員の中でも意見が分かれており、トイレについて

前回の意見	5
①良かったこと（子どもに期待したこと） ・アレルギーを心配する質問が出た→子どもの発想もヒントに！ →小学生も含めた委員会をしても？ ・子どもも自らが体験する事が大切→家に帰ってからも話題に。 ◎子どもを通じて若い世代に一定の防災啓発を行うことが出来た！ ◎子どもが地域の人と顔を合わせる機会になった。	
②悪かったこと（子どもの為に決めておくべきこと） ・授業からもっと大勢の保護者に参加して欲しかった。 ・運営準備（体育館の放送・凝固剤の体験ルール） ・なれなれしかった（逆に地域の大人に溶け込める重要な存在かも！） ・保護者で興味を示したのは小さい子供を連れているか、意識高い人。 ◎若い世代へのアピールとしては弱かった。低学年への取組はどうか??	

は、初動は凝固剤を使うという点は徹底し、今後の検討の中で変更していくこととした。

11月28日 第7回 安心委員会

概要：昨年度防災訓練の内容ふり返り
初動期マニュアル追加項目検討



ねらい：初動期マニュアルとして、3日以内にやるべき事の項目追加に関する意見出しを行う。その中から事前に体験しておくべき事柄について防災訓練の内容に反映していく。

これまでの活動を通じて、初動期マニュアルに追加すべき項目の意見出しを行った。これまでのマニュアルでは1週間以内にやるべき、と考えていた項目についても早いフェーズで手を付けるべきではないか、といった意見も出て、より災害時のイメージをもって検討ができてきていると感じた。今回のワークショップで出た追加項目を加え、初動期マニュアルをVer.Ⅱに改訂した。

※赤字が追加した項目。

詳細は添付資料マニュアル集を参照



12月19日 第8回 安心委員会（神社まち協全委員対象）

概要：直近2年間での災害ふり返り
今年度の防災活動報告（主に神社小学校での取組紹介）
神社地区防災訓練への協力依頼

ねらい：まちづくり協議会全体で防災活動を行っていくことへの意思統一。
神社地区防災訓練へ向けての意見聞き取りと協力依頼。

直近での風水害、土砂災害、地震などのふり返りを行い、いかに災害への意識が薄れやすいかを認識してもらった。常に災害は我が事であると認識し、目的を明確にあって訓練に臨む重要性を全委員に伝えた。また昨年と同様、安心委員以外のまち協役員に小学校との取組や検討してきた事項について報告し、

それに対する意見を募った。

防災訓練についても現状案をお伝えし、安心委員会だけでなくまち協役員全員で関わっていくよう会長よりご指示を頂いた。

1月16日 第9回 安心委員会

概要：防災訓練の役割分担決定
体験ブースごとの打合せ、資材作成

ねらい：訓練時の役割を町名でなく個人名で割り振ることで我が事として取組んでもらう。実際に機材を触ってみることで本番のイメージを掴む。

出口委員長を中心に全員に役割が与えられた。これにより自分が本番でどう動くのか明確になり、不安要素をそれぞれが考えるようになった。スペース体験で使う間仕切りに何を使うかなど、全て担当の委員同士で考え、決定してもらいうようにした。反省点として、各ブースとも何とかなるだろう、という雰囲気が出てしまい、前日に流れを確認できればリハーサルはいらないだろうという意見が出てしまった。去年の反省でリハをやるべきだったという意見が出ていた事を伝えたが、去年からのメンバーからも反対を受けたため、地域判断として尊重した。

2月1日 訓練事前準備

概要：会場設営、全体の流れ確認

ねらい：会場で全体の流れを確認することで、本番イメージとの差を埋める準備をしておく。

実際に担当ブースで準備をし、参加者の動きに合わせて通し稽古をしてみると問題が発生しそうな部分が見えてきたようで、委員同士で工夫をしながら準備を進めていた。

今回初めて屋外で行うブースは、広さの確認や住民説明の際の立ち位置・分かりやすさ、当日雨が降る事を想定した準備等が必要なことに気づき、対策を行うことが出来た。

参加者の動き					
5分前行動	神社港	馬瀬町	竹ヶ鼻町	下野町	小木町
9:30				移動	
9:40	避難環境スペース		非常持出袋	トイレ	消防避難
9:50				移動	
10:00				移動	
10:10	非常持出袋	避難環境スペース	消防避難	トイレ	
10:20				移動	
10:30				移動	
10:40	消防避難	トイレ	非常持出袋	避難環境スペース	
10:50				移動	
11:00				移動	
11:10	トイレ	消防避難	避難環境スペース	非常持出袋	
11:20				移動	
11:30				川口先生 講評	
11:40				解散、炊き出し	
11:50					
12:00					

2月2日 令和元年度 神社地区 防災訓練

日時：2月2日（日） 9:00～ 神社小学校にて実施。

訓練目的：楽しく参加できる防災訓練を目指し、若年層の参加を促す。
マニュアル追加項目に関して体験を通じて検証と気づきを得る。

見どころ：①マニュアルに追加した簡易トイレのレイアウトや、昨年訓練のアンケートで指摘のあった夜間や非常持出袋に関して体験ブースを企画した。
②ドローンや35Mのハシゴ車を用意し、避難や防災に役立つ技術を体験できるようにした。
③住民が住民に向けて運営する、住民主体の訓練

実施内容

9時00分	神社小学校グラウンド 集合
同時刻	施設安全確認実施
9時15分	受付訓練・収容訓練開始
9時30分	避難所ミニ体験（約20分×4ブース） ①避難所環境・ダンボールベッド体験 ②夜間のトイレ体験 ③非常持ち出し袋チェック ④施設避難体験 (ハシゴ車・煙道・屋上避難)
11時30分	講評
12時00分	炊出し

昨年同様訓練は2部構成となっており、前半は住民が避難所に集まってから体育館に受け入れるまでの訓練を実施した。後半は住民意識向上を目的とし、避難所がどういった所か知るための体験ブースを昨年の反省や課題を反映し、設計した。

前半の訓練については、昨年と基本的には同じ流れで進行した。地域住民に必ず集合し、受付し、避難所に入るという手順を身につけてもらうため、この部分は毎回同じ内容で実施することが重要だと考えている。昨年と違い意識したことは、施設の安全確認について参加者に説明したことだ。安全確認なく避難施設へ入る事のリスクを伝えた上で、実際の災害時にも安全確認を外で待つ必要がある、この待っている状態も訓練であることを参加住民に伝えた。

イレギュラーな部分としてハシゴ車を中心に避難している様子をドローンで撮影する予定だったが、許可が間に合わず室内でしか使用できなかったため、

急遽収容訓練の後で体育館の中央でドローンを使ってのパノラマ撮影を実施することとした。ドローンの使い方の1例を示すことはできたが災害時の情報収集や自由度の高いカメラワークといった部分は参加者には伝わりにくかったと感じている。ただドローンで撮影された画自体には参加者の興味は高く、訓練終了後にスクリーンに表示した写真には子どもを中心にお年寄りも関心をよせていた。



後半の訓練については、今年は2年目ということ、小学校との取組を行っていたこともあり、安心委員会のメンバーも余裕をもって訓練が実施できていたように感じる。各ブースについての簡単な説明は以下の通り。

①避難所環境・ダンボールベッド体験

内容：昨年の避難所で分け与えられるスペースを体験するのに加え、間仕切りを使用した環境整備についての体験を行った。また昨年は乗るだけだったダンボールベッドについても設営・撤去を参加者に実施させ、その仕組みや機能について理解を深めた。



間仕切りを使ったスペース体験



ダンボールベッド体験



みんなでダンボールベッド作り

②夜間のトイレ体験

内容：簡易組立トイレ（ドント・コイ）をレイアウト通りに屋外に設置。体験時間の都合上、参加者で組立と解体は行えなかったため、完成品1基と

パーティごとに分けたものを 1 基準備し、その機能について説明した。また要望の多かった夜間を意識するために発電機と投光器を設置し、夜間のトイレがどうなるかについても考え、体験した。



屋外に簡易組立トイレを設置し、実際のレイアウトでトイレ体験



ガス発電機を使って、神社小学校に備蓄されている 2 種類の投光器を使用

③非常持ち出し袋チェック

内容：昨年の防災訓練で川口先生から指摘のあった非常持ち出し袋を持ち寄るよう呼びかけ、参加者同士で中身の確認・アイデアの共有を行う。過去の災害で役に立ったと言われているお役立ちアイテムについて紹介し、その 1 つである携帯トイレ（凝固剤）を体験する。



④施設避難体験（ハシゴ車・煙道・屋上避難）

内容：避難所に入る前の避難について、煙道体験・外付け階段を使った屋上退避を通じて体験する。また35Mハシゴ車で救助の能力を知ること、校長先生から地震解錠Boxの場所と説明を受けるなど、いざという時に冷静に行動できるような体験も行った。



煙道体験



校長先生から地震解錠Boxを説明



ハシゴ車は屋上より高い所まで

体験ブース終了後、参加者は体育館の中に戻り、川口先生から講評をいただいた。



今年度の訓練では、体験ブースの最初と最後で説明のレベルが全然違う、ということではなく、一定のレベルを保って説明ができていた。これは昨年からの反省と小学校への取組を行うことで、経験が蓄積されていた結果であると感じる。委員にも参加者からレベルアップしているとの声を頂いたという意見もあり、運営への自信にも繋がった。どうしても参加者という相手がある運営になるので、いかに体験してもらうか、という工夫や誘導の仕方は今回もやりながら修正していたが、時間配分や話し方への反省で余計な時間がかからなかったのは2年目の成果であったと思う。唯一時間配分で当初の予定をオーバーしたのはハシゴ車の部分であったが、これは事前の予定人数に比べて当日の体験希望者が殺到したことによる時間延長であり、ポジティブな内容のため問題とするほどではなかった。昨年度の訓練時アンケートで要望のあった夜間の避難所を想定したブースを1つ作ったことで、参加者はもちろんのこと、委員も夜間や天候次第で考えなければならない課題を意識することができ、今後の避難所運営マニュアル作成方針の一助になったと考えている。課題として大きな目的であった若年層の参加であるが、参加者自体は増えたものの、特別若い人が多かった訳ではなかった。ハシゴ車の事前予約が少なかったことから、子どもに喜んでもらえるブース企画は行ったものの、子どもまでその情報が伝わらなかったのではないかと思う。早々に日程と大まかな訓練内容を決め、小学校との取組の中で訓練の案内も行っていくと効果があったかもしれない。来年度の1つの課題としたい。

今後の防災訓練の課題として、小学校の統合に伴って大湊地区まちづくり協議会との連携と、新小学校での訓練検討が必要になる。

※参加者アンケートについては添付資料を参照

2月13日 第10回 安心委員会

概要：防災訓練のふりかえり、来年度防災取組のテーマ検討

ねらい：防災訓練を通じて明らかになった地区の強みと弱みを整理して、来年度の取組テーマの方針を決める。

防災訓練のふりかえりとして、良かった意見は

- ①多くの人が体験してくれて良かった
- ②説明が去年よりレベルアップしていた
- ③想定以上に非常持ち出し袋を用意している人が多かった
- ④誘導がスムーズにできた

といった意見が出た。理由の中で、役割分担を決めていたことで業務が明確になって動きやすくなったため、上手く運営できたという声があり、来年度も継続することとした。2年目になり、ある程度全体の動きが予測できたことも大きい。

一方、上手くできなかった意見については

- ①事前準備不足な部分、不安を感じる部分があった
- ②参加者が少なかった
- ③炊き出しの大変さもPRすべき
- ④誘導が上手くできなかった

といった意見が出た。去年同様、結局リハーサルをした方が良かったという意見もあり、この点については大きな反省点となった。それに伴い、もっと早く役割分担を決めるべきとの意見も出ており、年間スケジュールに検討の余地があるようにも思えた。

誘導については良い意見も悪い意見も両方で出ていた。内容を聞くと、良い意見としては誘導係の配置や役割分担を明確にしたため誘導しやすかったというものだった。反対に悪い意見としては、当日に地区のブース移動順を変更したため、混乱が生じたというものであった。当日参加者数によるイレギュラー対応でのマイナス意見であり、仕方が無かったものといえる。全体的に見て、誘導灯を持ち大きな声で誘導していたため、誘導係の仕事としては十分果たしていたと考える。

来年度取組テーマとしては、すでに継続実施を決めた小学校との取組強化、もっと多くの人に体験してもらえるブース検討、防災活動への参加者増加、この3点があげられた。この2年間で行ってきた活動を安心委員のメンバーが中心になって継続し、是非ともマニュアルを1つでも2つでも改訂したものを体験ブースに反映していくようにして欲しいと伝えた。

(3) 令和元年度の防災活動報告として

令和元年度の安心委員会での活動を終え、年間の安心委員会の活動を「ぼうさい通信」として全戸配布することとした。

才モテ面

ウラ面

第3章 取組成果の活用と課題

1. 取組成果の活用と課題

(1) 令和元年度、神社地区での活動をふりかえって

1年を通して体験型の訓練を神社小学校5年生キャンプ、4・6年生の土曜授業、神社地区防災訓練の計3回実施しており、「体験を通じて防災を身につける」という手法が地域に根付きたための、大切な2年目となった。大きなイベントを増やすと、その準備で委員会の集まりを使うことになり、マニュアルの改訂という大きな目標に対して十分な時間が取れなくなったことは反省点である。ただ結果として、小学校への取組を通じて子どもと実際に関わってから、子どもに関するルールや配慮すべきことをマニュアル化できたため、取組の理想の形には沿った活動となっている。優先度の高い項目からマニュアル化を進める必要はあるが、今できる、協力を得られる部分から関わり、経験したものを作軸にマニュアルの肉付けをしていくことは、地域にとってはメリットが大きいように感じる。

小学生との取組について、神社地区においては初めての試みであったが、子どもたちも楽しく防災に関する体験ができたようで満足している。体験に対する積極性は大人よりはるかに高いので、防災訓練でも率先して体験を始めてくれる人材となるだろうし、継続して取り組むことで実災害の時も経験から、地域のリーダーへと成長してもらえるような希望を感じることができた。一方、被災時の生活環境の変化については大人よりも現実味をもてない面があるので、効果の最大化のためにも体験前の事前学習は必要である。ここは地域の人よりも専門家や先生から授業という形で子どもに理解を促すのが良いと思う。今年度は防災クイズという形で、どんな災害で避難が必要になるか、避難所はどんな場所か、といった内容を伝えたが、思いのほか高学年にもなると理解している部分が多くかった。しかし、実際に避難所に行きたいか聞くと、ゲームしたいから家に帰る。と答えるのが現実であり、そこを怖がらせるのではなく、いかにリアルに受け止めもらうか、といった工夫は今後の課題となった。

体験型の訓練については、参加者からも運営からも、避難訓練と講話を聞くだけの防災訓練よりも、楽しくよい経験になると多くの声が多く、地域主体で防災訓練を行うための1つの答えになると感じている（後述の伊賀市との共同取組で詳しい考え方を記述）。体験ブースの内容を新しくするためにマニュアルシートの検討・改善を行う、マニュアルの改善で検討した項目を防災訓練で動いてみると、この両輪を動かし続ければ、地域主導での防災活動は自動的に続いていく事になる。残念ながら2年間という時間の中で、目標としている形まで到達したとは言えない。取組当初から認識しているデメリットであるが、途中で辞めてしまえば何も形の残らない取組であるため、3年目の活動へも伊勢市危機

管理課としてある程度は関わっていく必要があると感じている。

(2) 伊賀市との共同取組について

本プロジェクトで、伊賀市は「地域の防災意識の向上と主体的に継続した取組を図れるような仕組みづくり」を目的として活動しており、アプローチは違えど伊勢市との共通した目標として「住民主体の避難所運営」があった。

2年間の本取組を通じて得た、水平展開への一例として、「体験型の訓練」を切り口とした活動事例があるので紹介する。

(3) 体験型訓練を通じた、伊賀市三田地区との水平展開について

伊賀市においては伊賀市総合防災訓練を活用して、住民に避難所運営について検討を促しながら防災訓練と一緒に実施することにした取組を実施。伊勢市においては避難所運営マニュアルを検討し、決定した内容を防災訓練で実施・検証する取組を実施した。両市はどちらも「住民主体の避難所運営」という共通の課題があったため、どのようにすれば地域が主体的に避難所運営できるようになるかを協同で検討していくと連携取組を行った。

まず、地域主体の避難所運営ができるようになるための一般的な年間プロセスとして

- 勉強会（講話等）の実施
- 避難所運営検討委員会など組織の設置
- 避難所運営マニュアルの作成
- 避難所運営図上訓練（HUG）の実施
- 避難所運営訓練（防災訓練）
- 反省会（マニュアルの修正等）

といった項目を考えた。この一連の流れをPDCAサイクルとして修正していくことで住民主体の避難所運営を実現するという考え方である。

伊賀市において、このプロセスを1年の取組案として地域に提示したが、地域は当初から「できないと思う、難しい」という反応だった。そこで、伊賀市では1から何を地域はやりたいか（必要としているか）というゼロベースからの取組を始めた。伊勢市においては、避難所運営マニュアルの作成の難易度を下げ、少しずつ積み上げていく方法でアプローチした。

それでも住民主体の避難所運営はかなりハードルが高いため、このハードルを下げるためにどうすればよいかを中心に検討したが、その中で、簡単にできて住民に意識してもらいやすい方法として、避難所体験（訓練）がいいのではないかと考えた。

避難所体験訓練を実施する上で、気を付けた点は以下の2つである。

①避難所体験（スペース、トイレ、ダンボールベッドなど）をしてもらう
②体験ブースでの説明は、住民（防災委員）が地域住民に対して行う
この 2 点については一貫し、それ以外は地域と相談しながら内容をまとめいった。

1 年目の伊賀市山田地区では、避難所体験よりも避難訓練に重点を置いた訓練にしたいという地域の要望に沿ったため実施できなかったが、伊勢市神社地区において避難所体験を実施した。

住民主体の避難所運営や防災活動を行う上で、講演や劇場型の訓練だけでは我が事と捉えにくい。地域の腹に落ちた形での推進を行うため体験型の訓練を行ってみたところ、訓練のふり返りでの住民の意見からも、実際に身体を動かす事で住民の知識だけでなく経験として蓄積されており、さらに、継続した活動へのハードルが低い手法であったと感じた。

2年目においては、さらなる取組のブラッシュアップを行った。

まず、伊勢市神社地区においては神社小学校と連携し、4~6 年生の児童を対象とした授業の中で避難所体験を行った。防災訓練と内容は同一にしながらも、訓練での反省点を改善するための運営方法や時間配分の設定、児童に分かりやすい説明文となるような原稿作りを実施した。対象が児童ということもあり、体験前に「避難所が何のためにあり、どんな場所であるのか」をイメージしてもらうため、「防災クイズ」という形で学習の時間も設けた。

次に、伊賀市三田地区においては、リアル HUG と連動しながら実際に災害時におこり得る状況を劇で再現（伊賀市災害ボランティアセンターと連携）し、水木先生（有識者）の解説を交えながら参加住民に体験してもらう形で実施した。

最後に、伊勢市神社地区2年目の訓練において、夜間を想定するなどより現実に近いイメージをもつための新しい体験ブースも作成した。（詳しい体験ブース内容については、伊賀市・伊勢市の具体的な活動項目を参照）

この連携協同プロジェクトを実施していく中で、「地域住民から出た意見」を条件の異なる交流のない 2 地区において、反省を活かした活動に繋げていくことができた。他地区が行っていることを伝えることで、それぞれの防災に関わってくれた地区委員も納得し、改善点をさらに取り入れやすくなつたのではないかと感じている。PDCA のサイクルという観点からも年に 1 回の訓練で修正と改善を行うよりも、多くの地区でベースとなる資料を共有することで 1 年のうちに何度も修正・改善のサイクルを回すことができたことも大きな取り組み成果であった。すでに令和 2 年度においての取組も進んでいる。伊賀市では、

とある地区において、神社小で行った防災学習（避難所体験）を実施する方向で小学校と協議中である。伊勢市では神社小学校の4～6年生に加えて2年生にも防災体験を企画しており、去年と合わせると新入生以外は全員が体験授業を受けるよう企画している。今後も、両市で協力しながらさらなる取り組みを進めていきたいと思っている。

この連携取組のように、取組の潤滑油となる部分はある程度共通した連携研究員のようなファシリテーターの存在が必要になるかもしれないが、こういった地域と地域をつなぐ役割をみえ防災・減災センターが担っていけば、地域の活動サイクルを何倍ものスピードで進めていける可能性があるのではないかと期待している。

(4) 伊勢市における他地域への展開

2年間の本取組みをふりかえると、その実態は、従来の伊勢市の手法を踏襲するものではなく、防災に配属されて1年目の職員が、外部の研修から刺激を受け、先進地の良い事例をいかに神社という地区に取り入れることが出来るか、という実験であったように思う。初動期のみに重点を置いたマニュアルや指示書となるマニュアルシート、体験を軸とした訓練設計など、神社地区以外にも取り入れて欲しい要素は多く得られた。ただ、現在の神社のマニュアルを他地区がそのまま取れ入れても意味は無い。やはり第2章に記載したような毎月のグループワークと意思決定、それを周知し、話し合いを行う時間の共有が地域に防災への意識を定着させ、魂のこもったマニュアルへと変わっていくのだと思った。

水平展開をしていく上で、いくつもある手法の中から、まずは本取組みのような避難所運営マニュアルの作成手順を、地域が取り入れるかの判断が必要になる。また行政側の時間やマンパワー不足の問題から、手順の省略化も検討していく。地域事情やハザードの違いはあっても、避難所運営の初動期で問題となる部分の多くは地域で共通であると思う。取組に賛同した地区を一同に集めての説明会など、本取組みの主旨は変えずに取り入れができる手法を今後は検討していく。このような導入の基本になる部分は単純化し、地域の持つ特有の課題については寄り添いながら、じっくり時間をかけて丁寧に進めることが必要であると考えている。

最後に、本取組みにおいて様々ご指導を頂きました川口先生、水木先生には心より感謝致します。

神社地区 避難所運営マニュアル



平成31年3月作成

神社地区まちづくり協議会

はじめに <重要>



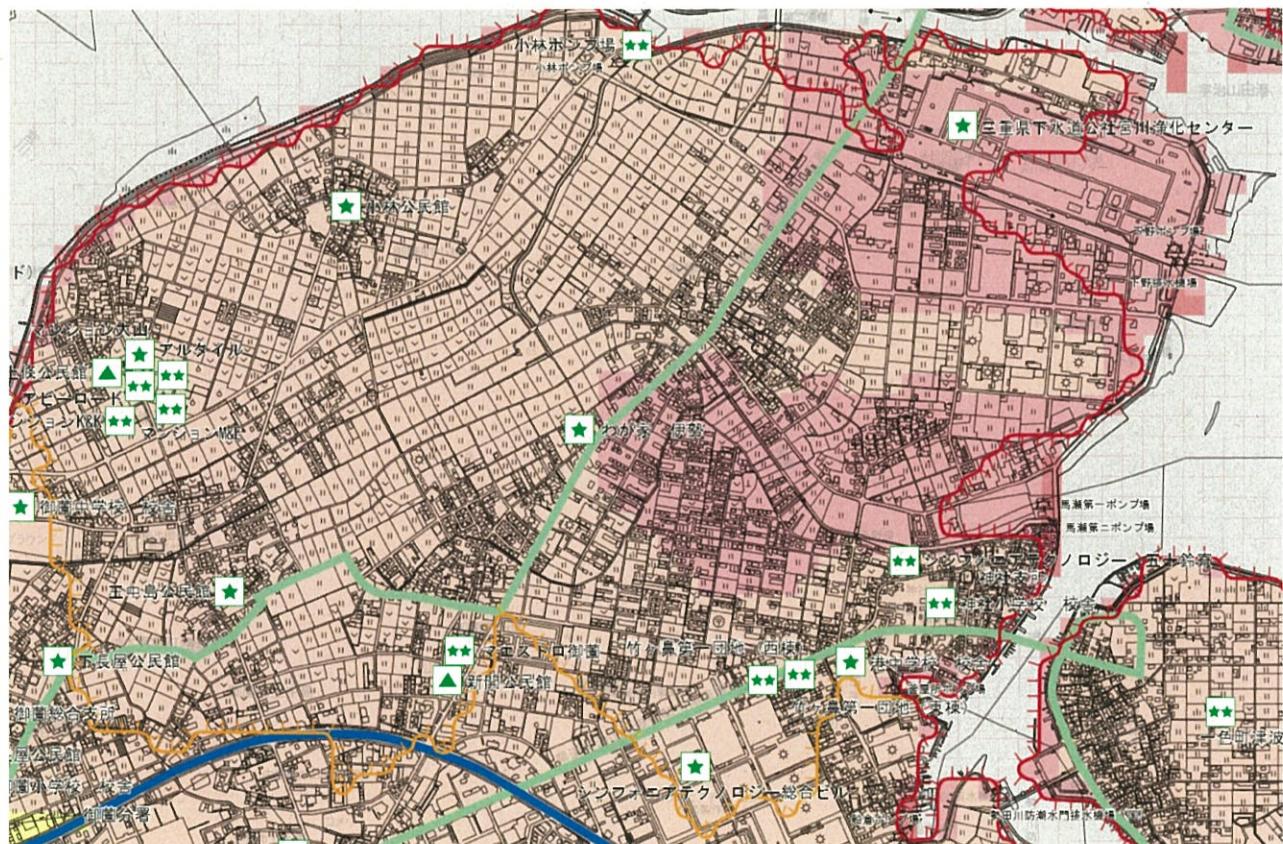
・津波避難の実施

神社地区は津波による被害が想定される地域です。

状況が分からぬ場合は必ず校舎屋上への津波避難を実施し、まずは命を守るよう行動してください。

ラジオやインターネットで津波の恐れがない事を確認してから避難所開設作業を始めてください。

・神社地区ハザードマップ



津波ハザードマップは伊勢市ホームページから確認できます。

避難所運営マニュアル 目次

避難所運営の流れを確認しながら全体の進捗管理を行います。

役割者（各班員）は本カードに沿って運営を行い、☑チェックを入れたら運営本部に報告します。

避難所運営を始める前に 3

避難所運営の流れ 5

シートA 受付と避難所収容
内容：受付・避難者管理・名簿

シートB 避難スペースの整理 7
内容：レイアウト・避難者の収容

シートC 避難所トイレの確保
内容：衛生管理・凝固剤管理

シートD
シートE
今後検討
⋮
シートZ こどもへの配慮
3



避難所運営を始める前に

夜間・雨天等の状況も想定されますが、十分な安全確認を行ったうえで避難所の開設に移行してください。安全第一！！

・施設の解錠について

神社小学校体育館の解錠は施設管理者・まちづくり協議会役員・市職員の中から一番最初に避難所に到着した者が行う。

神社小学校の外付け階段入口に自動解錠Boxが設置されている。上記役割者が参集できない場合は避難者で話し合いのうえ体育館の解錠を行う。

解錠にあたっては下記の安全確認と並行して行う。安全が確認されるまで避難者が入場しないよう、住民誘導を行い、安全確認を実施している旨の周知徹底を行う。

・施設の安全確認

体育館と、その周辺の被害状況と安全性の確認を行う。

この調査は、安全な避難所を迅速に開設するために、暫定的な初期診断として行うものであり、調査者に何らかの責任を負わせるものではありません。

事項のチェックシートに従って応急危険度判定を行う。点検にあたっては、2人1組体制で互いの安全を確認しながら行う。危険箇所及び余震に十分注意し、身の危険を感じたら直ちに調査を中止すること。

現状は三重県の避難所運営マニュアル様式に掲載されている施設安全確認票を作成しているので完成したら差替え予定。
伊勢市の建築住宅課がチェック表を作成している

株式 1-③ 施設安全点検用紙<鉄骨造>

点検年月日 年 月 日 点検者

1. 建物概要

所在地 _____

建物名称 _____ 建物用途 _____

管理者：氏名 _____ 建設年 _____

次の質問の該当するところに○をつけて下さい。

質問1. 建物周辺に落すべりやがけくずれ、地割れ、陥没、液状化などが生じましたか？

- A. 生じていない
- B. 生じた
- C. ひどく生じた

質問2. 建物が沈下しましたか？あるいは、建物周囲の地面が沈下しましたか？

- A. 沈下していない
- B. 沈下は数cm程度と少ない
- C. 沈下は10cm以上である

質問3. 建物が傾斜しましたか？

- A. 見た目だけでは判らない
- B. 目で見てかすかに傾斜している
- C. 目で見て明らかに傾斜している

質問4. 建物の外壁が剥離しましたか？

- A. 外壁にわずかな割れ目（以下「きれつ」と呼ぶ）が生じている。壊れていない場合も含む
- B. わずかな落下や目地（外壁のつなぎ目）の部分にそれが生じている
- C. 壊れて部分的あるいは大きく剥がれ落ちている。外壁全体に「きれつ」が入っているか、あるいは、剥がれて落下しそうである
(なお、庇・バルコニーや屋外広告物など高いところにある重量物が、グラグラして落ちそうになっている場合は、「C」と答えて下さい。)

質問5. 建物の内壁が剥離しましたか？

- A. わずかなきれつが生じている。壊れていない場合も含む
- B. わずかな落下が生じている
- C. 壁が部分的あるいは大きく剥がれ落ちている

質問6. 天井が壊れましたか？

- A. いいえ
- B. 少し傾いている。下がっている
- C. 大きく傾いている。下がっている

質問7. 間柱の柱の脚部でコンクリートと接する部分が壊れましたか？

- A. 完全である。内外装など仕上げのために見えない場合も含む
- B. コンクリートの損傷は、きれつが少し見られる程度である
- C. コンクリートが壊れるように壊れている。あるいは、柱をコンクリートにとめているボルト（アンカーボルト）が破断・引き抜けている

質問8. すじかいが切れましたか？

- すじかいには、天井面に配された水平すじかいと壁面に配された鉛直すじかいがあります。鉛直すじかいは、壁面の窓の開閉の邪魔になる斜めの材です。
- A. すじかいに損傷はほとんど見られない。内外装など仕上げのために見えない場合も含む
- B. すじかいの破断が極少しみられる程度である。あるいは、良く見るとすじかいの端のボルトでつないだ部分や溶接した部分にすべりや破断の徵候がみられる
- C. すじかいの破断が各所でみられ、切れたすじかいの本数は全体の本数の半分程度である

質問9. ドア・窓などの部品が壊れましたか？

- A. わずかなきれつ程度で、開閉には少々支障をきたす程度である。壊れていない場合も含む
- B. ドア・窓がかなり開閉しにくい。また、角（カド）の部分（以下「隅角部」と呼ぶ）にきれつなどが生じている
- C. ドア・窓が開閉できない状態であるか著しく壊れている（Cの解答はありません。）

質問10. 天井や隔壁構造などが壊れましたか？

- A. 壊れていない
- B. 落ちそうになっている
- C. 落下した（何が：）（Cの解答はありません。）

質問11. その他のについての被害を記入して下さい。

質問1～11を集計して下さい。

判定

集計	A	B	C
	()	()	()

質問1～8にCの答えが一つでもある場合は「危険」です。Bの答えがある場合にも「要注意」です。それ以外は「安全」ですが、その場合でも、落ち着いてきたら応急危険度判定士等の専門家（以下「判定士」という）が相談に応じますので、判定士並びに市町村の災害対策本部へ相談して下さい。

神社地区避難所運営マニュアル Ver.2

0 分

- 避難所の鍵を開ける（校長先生・役員）
- 施設の安全確認（使用禁止・立入禁止場所の決定）
- 受付・名簿作成（安否確認）
- トイレ・凝固剤の準備**
- 避難所レイアウト・避難者の配置

24 時間

- 支援物資置場の決定
- 物資の確認・周知、**不足物資の確認・要請**
- 運動場（駐車スペース、子供の遊び場）の割当**
- 情報共有・発信・**掲示板の設置**
- 避難者への役割付与
- 発電機の準備**
- 炊き出しの確認
- 通院できなくなった人への対応・薬剤確保
- 男女別の更衣室・物干し場の設置**
- 要支援者への対応

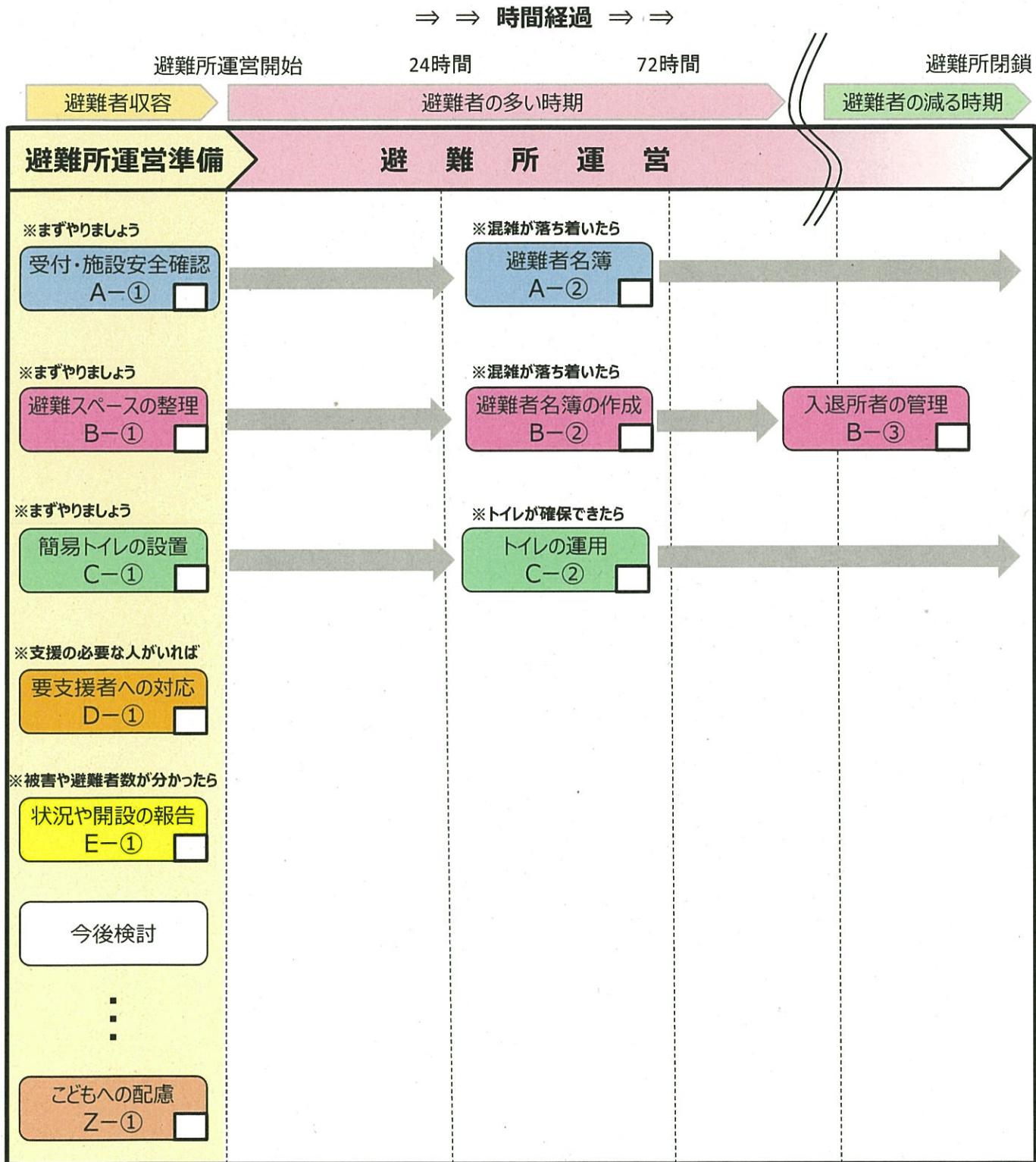
72 時間

- 感染症予防
- マスク対応
- ゴミ出し・回収ルール**
- 食料以外の物資確保
- 通院できなくなった人への対応・薬剤確保
- 掃除**
- 風呂**
- 起こったことの記録づけ
- 洗濯・物干し



避難所運営の流れ 一時系列チェックリスト

下表の時間を目安に、避難所の状況に応じて各活動を実施します。（実施したら□）



- ★ 避難所の安全を確認するために、応急危険度判定を行う必要があります。
- ★ 原則、建物の安全が確認されるまで避難者には外で待機してもらいます。
- ★ 安全が確認されたら受付に誘導し、避難所内への受入を行います。

1 施設の安全確認 - 応急危険度判定 -

チェック



避難所内の安全が確認されるまで外で待機してもらうよう避難者に呼びかけます。

- ※ 現在、安全の確認を実施している事を周知し、その後受付が必要な事を委員全体で声掛けしましょう。
- ※ 雨等でどうしても外で待てない場合は、判定次第では避難所から出る必要がある事を必ず伝えます。

チェック



三重県の施設安全点検用紙に沿って応急危険度判定を実施します。

○ A 判定の場合 ⇒ 受付を開始します。

裏面「施設安全点検用紙」参照

○ B/C 判定の場合 ⇒ 別の安全な避難所に移動します。

2 受付 - 簡易受付 -

チェック



町ごとに受付台を準備し、世帯主に記入してもらいます（様式 2-1 避難所簡易受付簿）。

○世帯人数ではなく、実際に避難所に逃げてきた人数を記入するよう注意を促します。

○世帯主以外は先に避難所内に入つて構いません。

避難所内には **B-①** 避難所スペースのレイアウトに沿つて、町ごとに受入を行います。

<注意点>

○受付を通らずに避難所内に入る人がいないよう注意が必要です。

○避難所を出て自宅や他の避難先に移動する場合は、必ず事務局まで声をかけてもらうよう伝えてください。

（在宅避難への対応や支援物資の配分に影響してきます。）

避難所の状況が落ち着いてきたら

★避難所を出られる方は必ず運営に報告し、可能であれば行先を教えてもらいます。

★長期の避難（精神的理由を含む）が見込まれる方については「A-②」を実施します。

避難所建物の応急危険度判定

様式 1-③ 施設安全点検用紙〈鉄骨造〉

点検年月日 年 月 日 点検者

1. 建物概要

所在地: _____
建物名称: _____ 建物用途: _____
管理者: 氏名 _____ 建設年: _____

次の質問の該当するところに○をつけて下さい。

質問 1. 建物周辺に地すべり、がけくずれ、地割れ、噴砂・液状化などが生じましたか?

- A. 生じていない
- B. 生じた
- C. ひどく生じた

質問 2. 建物が沈下しましたか。あるいは、建物周囲の地面が沈下しましたか?

- A. 沈下していない
- B. 沈下は数cm程度と少ない
- C. 沈下は 10 cm以上である

質問 3. 建物が傾斜しましたか?

- A. 見た目だけでは判らない
- B. 目で見てかすかに傾斜している
- C. 目で見て明らかに傾斜している

質問 4. 建物の外壁が壊れましたか?

- A. 壁面にわずかな割れ目（以下「きれつ」と呼ぶ）が生じている。壊れていない場合も含む
- B. わずかな落下や目地（外壁のつなぎ目）の部分にずれが生じている
- C. 壊れて部分のあるいは大きく剥がれ落ちている。壁面全体に「きれつ」が入っているか、あるいは、剥がれて落下しそうである
(なお、庇・バルコニーや屋外広告物など高いところにある重量物が、グラグラして落ちそうになっている場合は、「C」と答えて下さい。)

質問 5. 建物の内壁が壊れましたか?

- A. わずかなきれつが生じている。壊れていない場合も含む
- B. わずかな落下が生じている
- C. 壁が部分的あるいは大きく剥がれ落ちている

質問 6. 床が壊れましたか?

- A. いいえ
- B. 少し傾いている。下がっている
- C. 大きく傾いている。下がっている

質問 7. 鉄骨の柱の脚部でコンクリートと接する部分が壊れましたか?

- A. 健全である。内外装など仕上げのために見えない場合も含む
- B. コンクリートの損傷は、きれつが少し見られる程度である
- C. コンクリートが潰れるように壊れている。あるいは、柱をコンクリートにとめているボルト（アンカーボルト）が破断・引き抜けている

質問 8. すじかいが切削しましたか?

- すじかいには、天井面に配された水平すじかいと壁面に配された鉛直すじかいとがあります。鉛直すじかいは、壁面の窓の開閉の邪魔になる斜めの材です。
- A. すじかいに損傷はほとんど見られない。内外装など仕上げのために見えない場合も含む
 - B. すじかいの破断が極少しみられる程度である。あるいは、良く見るとすじかいの端のボルトでつないだ部分や溶接した部分にすべりや破断の徵候がみられる
 - C. すじかいの破断が各所でみられ、切れたすじかいの本数は全体の本数の半分程度である

質問 9. ドア・窓などが壊れましたか?

- A. わずかなきれつ程度で、開閉には少々支障をきたす程度である。壊れていない場合も含む
- B. ドア・窓がかなり開閉しにくい。また、角（カド）の部分（以下「隅角部」と呼ぶ）にきれつなどが生じている
- C. ドア・窓が閉閉できない状態であるか著しく壊れている（Cの解答はありません。）

質問 10. 天井や照明器具などが壊れましたか?

- A. 壊れていない
- B. 落ちそうになっている
- C. 落下した（何が：_____）（Cの解答はありません。）

質問 11. その他目についた被害を記入して下さい。

質問 1～11 を集計して下さい。

判定

集計	A	B	C
	()	()	()

質問 1～8 に C の答えが一つでもある場合は『危険』です。B の答えがある場合にも『要注意』です。それ以外は『安全』ですが、その場合でも、落ち着いてきたら応急危険度判定士等の専門家（以下「判定士」という）が相談に応じますので、判定士並びに市町村の災害対策本部へ相談して下さい。

！安全に十分留意し、必ず 2人1組で調査を行うようにしてください！

- ★ 避難所内は人の出入りも多く、正確な人数把握は極めて困難です。
- ★ ある程度落ち着いたタイミングで、期限を決めて避難者名簿を作成しましょう。
- ★ 個人情報になるので、管理する責任者を決めておきましょう。

1 避難所簡易受付簿の記載（受付時）

チェック



各世帯代表者に避難所簡易受付簿の記載を依頼します。

様式 2-1「避難所簡易受付簿」参照

- ※ 代表者以外の方は先に体育館内に入ってもらいます。
- ※ 身内の数ではなく、避難してきた人数を記載してもらうよう注意します。

チェック



避難所簡易受付簿は町ごとに受付担当が集約し、本部に提出します。

チェック



世帯ごとに避難者カードの記載を依頼します。

裏面「避難者カード記載方法」参照

※可能な限り全ての項目の記載を依頼しますが、強要をするものではありません。

ただし、人数等は支援を受ける際に必要な情報になるため、電話番号の欄までは記載してもらうよう依頼します。

※人数把握のため、避難所を退所する際には必ず本部まで声掛けしてもらうよう伝えておきます。

避難所全体に何日、何時までに提出してもらうようアナウンスを行います。

※避難者情報を集約して、必要な物資や医療の提供を申請していく、という目的も一緒にアナウンスします。

→ 提出期限を過ぎても提出がない世帯には声掛けを行います

→ 避難所を退去する際には退去後の住所等を可能な限り記載してもらうようにします。

避難者カード記載方法

管理しやすいよう通し番号
を記載します

様式○(記入者:避難者)	避難所番号	避難所名	担当:	整理番号:	取扱注意
		神社小学校			

2-2 避難者カード

避難者カード(世帯単位)

年月日現在

区分 (どちらかに○)		避難者(避難所での生活を希望)					
		避難所外避難:自宅・車・その他(場所)					
入所年月日	月 日	退所年月日	月 日				
自宅住所							
ここに 避難して きた人 のみ記 入	ふりがな 氏名	性別	年齢	要配慮者※1等 配慮が必要なこと	協力可能 事項※2		
		男・女					
		男・女					
		男・女					
		男・女					
		男・女					
自宅電話番号	携帯番号						
安否不明の家族		いない いる → 安否不明者の氏名 :					
安否の問い合わせに氏名等をお伝えしてよいですか(必ずどちらかに○印)		よい よくない					
その他、特別な事情や注意点など							
既往の病気			医師から 処方されている薬剤	ある → 手元に何日分ありますか? (日分) ない			
加入自治会	(自治会) 未加入		バット	同行あり・同行なし			
自宅の被害	全壊・半壊・一部損壊・被害なし・不明		ライフライン	停電・断水・ガス停止			
緊急連絡先	(氏名 : 電話番号) → (:						
退所後の住所			退所後の電話番号				

※1 要配慮者: 介護が必要な人、障害者、乳児、妊産婦、食物アレルギー、日本語がわからない人等。

※2 協力可能事項: 避難所運営で協力できることがあれば、下記の番号を記入してください。

- | | | | |
|-------------|-----------------|---------------|----------|
| 1. 清掃活動 | 8. パソコンデータ入力 | 15. 通訳翻訳(語) | 22. 点訳 |
| 2. 炊き出し(調理) | 9. ホームページ、SNS | 16. 避難者の見守り | 23. 学習補助 |
| 3. 栄養士 | 10. 書類整理 | 17. 簡単な身体介助 | 24. 遊び相手 |
| 4. 物資配布 | 11. 会計 | 18. 介護 | 25. 保育士 |
| 5. DIY(大工) | 12. 記録(写真・動画) | 19. 看護 | 26. 教員 |
| 6. 電気工事 | 13. 車両誘導・整理 | 20. 手話 | 27. その他 |
| 7. 水道工事 | 14. 警備・パトロール | 21. 要約筆記 | () |

特技や資格をお持ちの方に
必要な協力をお願いします

- ★ 避難所を円滑に運営する為には、居住・共有スペースを決めて周知する必要があります。
- ★ 各スペースにはそれぞれの用途を明確にするとともに、ルールを周知し、守ってもらいます。
- ★ A-①②③を活用し、時期に応じた空間配置を実施してください。

1 居住スペース － 避難直後に行うこと －

チェック



レイアウトに沿って町ごとにスペースを割り振り、5町旗を設置します。

※ 避難当初は一時的に避難している方も多いので、広いスペースの中で町ごとにまとまってもらいます。

[裏面「避難所レイアウト」参照](#)

チェック



避難者を各町ごとに収容します。

チェック



要配慮者へ、適切な支援を行います。

○体育館での避難生活が可能 ⇒ 環境の良い避難スペースを確保します。

○体育館での避難生活が難しい ⇒ D-①

[裏面「災害時の要配慮者対応例」参照](#)

2 共有スペース － 避難直後に行うこと －

チェック



トイレの使用可否を確認し、避難者に周知します。

○施設のトイレが使える場合 ⇒ 避難者に周知します。

○一部のトイレが使える場合 ⇒ どのトイレが使えるか周知し、使えないトイレを立入禁止にします。

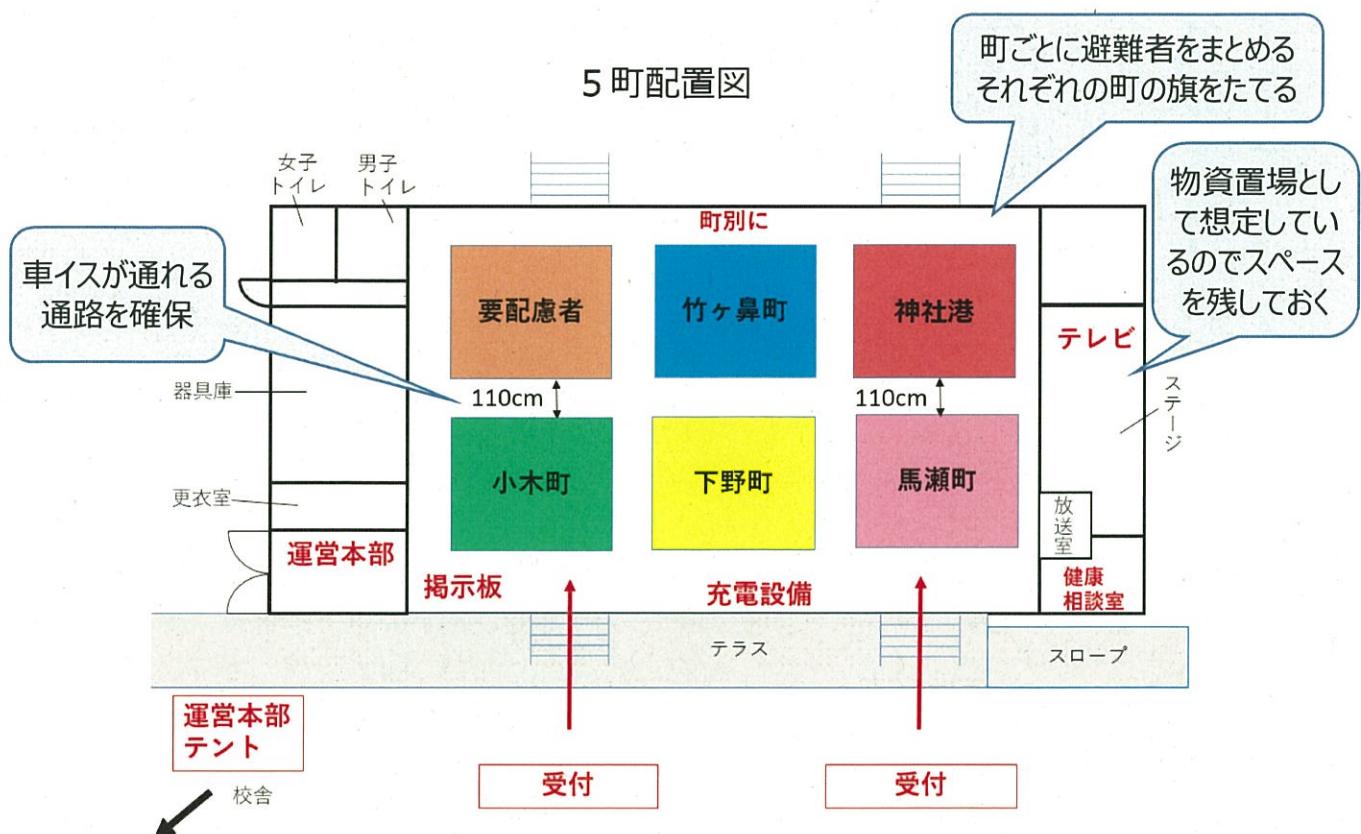
○トイレが使えない場合 ⇒ 早急に C-① に沿って簡易トイレや凝固剤の準備をします。

避難所の状況が落ち着いてきたら

居住スペースについては「A-②」を実施します。

共有スペースについては「A-③」を実施します。

避難初期の空間配置（体育館）



災害時の要配慮者対応例

★他の避難者と同じ場所で支援が可能な場合

- 足腰が悪い
 - 目が見えない
 - 支援が必要
- など

- 《優先的に環境の良いスペースへ》
- 身動きが楽、トイレに行きやすい
 - 運営がすぐに支援できる
- など

★他の避難者と同じ場所では支援が難しい場合

- 共同生活ができない
 - 介護が必要
 - 歩行困難
- など

- 《教室など、別の部屋を配慮》
- 過ごしやすい、家族が介護しやすい
 - 周囲とのトラブルを避けられる
- 注) 別部屋の安全確認が必要

※避難所の状況が落ち着いてきたら、より良い環境整備ができるよう検討しましょう。

トイレ① 「簡易トイレの設置」

C-①

- ★ 下水管が破損している可能性があるため、確認がとれるまで水洗は使えません。
- ★ 使用不可等の掲示やゴミの置場など、避難者に周知が必要です。
- ★ ルールを徹底しないと、大きなトラブルにつながるので早急に管理体制を整えましょう。

1 トイレの使用準備

チェック



体育館内の常設トイレ（個室）に簡易トイレを設置します。

- ※ 下水管の状況が分かるまでは、全ての排泄は凝固剤で処理します。
- ※ 各個室に凝固剤を10個程度設置します。

裏面「レイアウト」参照

チェック



男性トイレの小便器には使用不可の貼紙・禁止テープを貼ります。

- ※ 貼紙は手書きで問題ありません。早めに準備しましょう。

「様式5-1：トイレ貼紙」参照

チェック



レイアウトに沿って、簡易組立トイレ（ドント・コイ）を設置します。

- ※ 校舎前の防災倉庫に簡易組立トイレ「ドントコイ」が2基収納されています。
- ※ 男性用と女性用が一目で分かるように、分かりやすい掲示をしましょう。

裏面「レイアウト」参照

2 衛生上の管理について

チェック



少なくとも1時間ごとにトイレ内の点検・掃除を行い、正しく使われているかチェックします。

- ※ 問題があった場合に犯人捜しはしませんが、避難者への周知は都度行いましょう。
- ※ 点検・掃除は避難者と協力し、男性と女性が必ず関わるよう配慮します。

2 仮設トイレの設置

チェック



仮設トイレの物資支援が届いたら、運動場レイアウトに沿ってプール横に設置します。

- ※ 投光器は備蓄倉庫に2基あります。状況に応じて設置場所を検討します。

裏面「レイアウト」参照

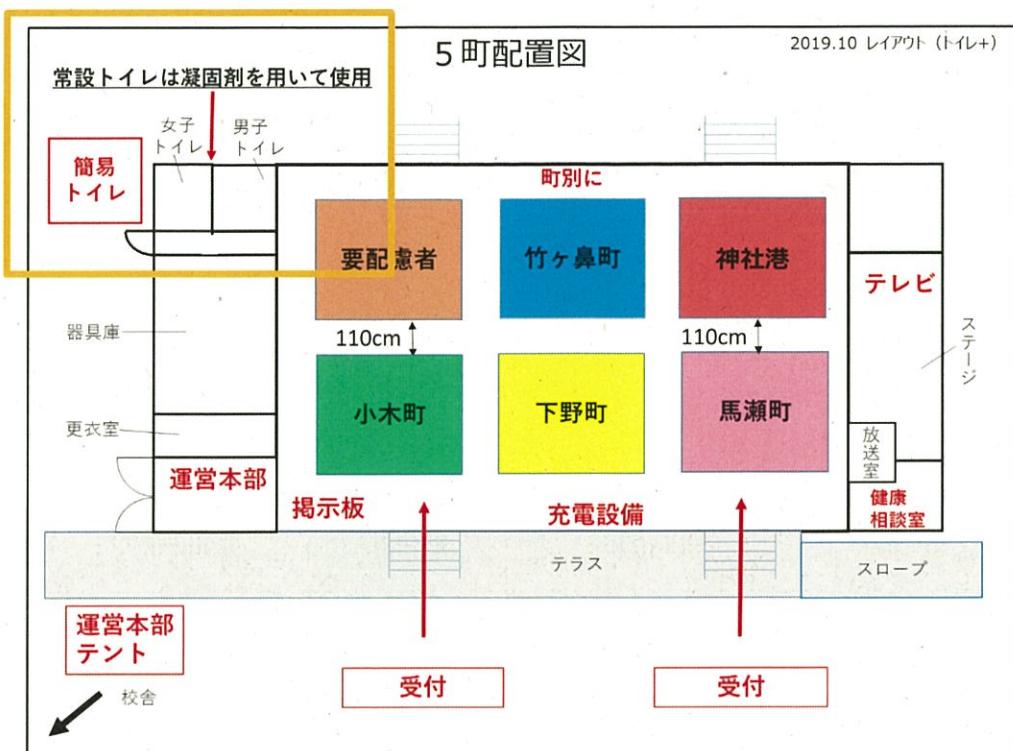
★トイレをキレイに保つためには、避難者全員が管理・掃除に関わる必要があります。

避難初期から全員の仕事とし、当番を決めて避難者に協力してもらうようにしましょう。

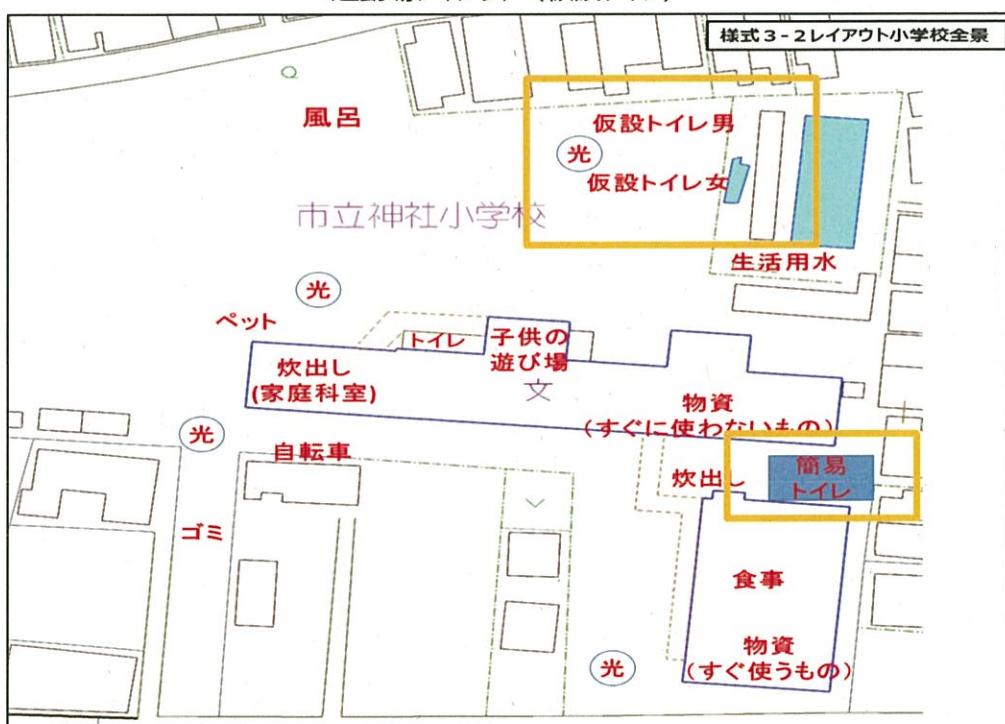
★生理用品については女性の意見を取り入れ、保管場所・配布方法等を検討していきます。

トイレ設置レイアウト

体育館レイアウト（常設トイレ+簡易組立トイレ）



運動場レイアウト（仮設トイレ）



- ★ 未成年・学生については避難所運営に協力を促すとともに、配慮も必要です。
- ★ あらかじめこどもたちに協力して欲しい内容、任せられる役割を検討しておきましょう。
- ★ こどもの心への負荷は大人以上です。状況に応じて子供の参画を呼びかけましょう。

1 こどもに配慮すべきこと

チェック



こどもの遊び場、走り回れるスペース、勉強場所を確保する。

裏面「校舎レイアウト」参照

- ※ こどものストレス発散、他の避難者とのトラブル回避のため、思いっきり遊べる場所を設定します。
- ※ 設定した場所においては、「うるさい・走るな」等の大人の干渉を受けない場所として定義します。
- ※ 場所の管理については教員とも可能な限り協力して行います。

チェック



体育器具庫前のスペースを、こどもの運動の場所として確保する。

- ※ 利用者が多い場合は、一日の中で時間を決めて学年ごとにスペースを割り当てる。
- ※ 緊急車両の出入り等を考慮して、必要があれば場所の再設定を検討する。
- ※ 避難車の車については、理解を求め移動を促し、できるだけ広いスペース確保に努める。

チェック



図書室を読書、コンピューター室を勉強の場として確保する。

- ※ 要支援者が多数いる場合、教室をどう割り当てるかは運営会議の中で決定します。

チェック



物資の中の菓子類はこどもに優先的に配布する。

2 保護者に依頼すること

チェック



スペース運用前に保護者を集めてルールの確認をします。

- ※ こどもの安全配慮は各家庭で行います。
- ※ こどもどうしで起きたトラブルは運営責任ではなく各家庭で解決してもらうようにします。
- ※ 避難者が多い場合は、保護者の仕事としてこどもの集まる場所の管理を任せても良い。
- ※ 守られない場合、こども用のスペースは撤去せざるを得なくなるかもしれない事を伝えておく。

3 こどもに手伝って欲しいこと

チェック



こどもたちの精神状態に注意しながら、無理のない程度に手伝いをお願いしていきます。

○物資の配給 ⇒ 食事や支援物資の配給を手伝ってもらう

(配分や多く物資を欲しがる利用者に対しては必ず運営が対応すること)

○避難所全体への呼びかけ ⇒ 放送設備を使った朝の呼びかけ等

(原稿は運営が携わって、必要な情報を整理する必要がある)

○高齢者の散歩や運動の付き添い ⇒ 高齢者と一緒に外に出る

(トラブル・事故があれば必ず運営に連絡する係を作る。)

○通路や生活場所の掃除 ⇒ 必ず大人も高齢者も関わること

(不公平感をなくすために、避難者全員で行う仕事とする。)



こどもの遊び場・学習室については早々に確保し、
こどもたちのためにも極力他の用途には使わないようにします。

避難所簡易受付簿

(照合番号：)

地区名	地域外
-----	-----

※避難してきた家族ごとに記入してください。

No	氏名（世帯主）	住所（町名地番）	人数	備考
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				

様式○（記入者：避難者）

担当：

避難所番号	避難所名
	神社小学校

整理番号：

取扱注意

避難者カード（世帯単位）

年月日 現在

区分		避難者（避難所での生活を希望）			
(どちらかに○)		避難所外避難：自宅・車・その他（場所）			
入所年月日	月 日	退所年月日	月 日		
自宅住所					
（ここに避難してきた人のみ記入） 避 難 者	ふりがな 氏名	性別	年齢	要配慮者※1等 配慮が必要なこと	協力可能 事項※2
		男・女			
自宅電話番号	携帯番号				
安否不明の家族	いない・いる → 安否不明者の氏名：				
安否の問い合わせに氏名等をお応えしてよいですか（必ずどちらかに○印）		よい・よくない			
その他、特別な事情や注意点など					
既往の病気	医師から 処方されている薬剤		ある	→手元に何日分ありますか？ (日分)	
加入自治会	(自治会)	未加入	ペット	同行あり・同行なし	
自宅の被害	全壊・半壊・一部損壊・被害なし・不明		ライフライン	停電・断水・ガス停止	
緊急連絡先	(氏名：電話番号) → ()				
退所後の住所	退所後の電話番号				

※1 要配慮者：介護が必要な人、障害者、乳児、妊産婦、食物アレルギー、日本語がわからない人等

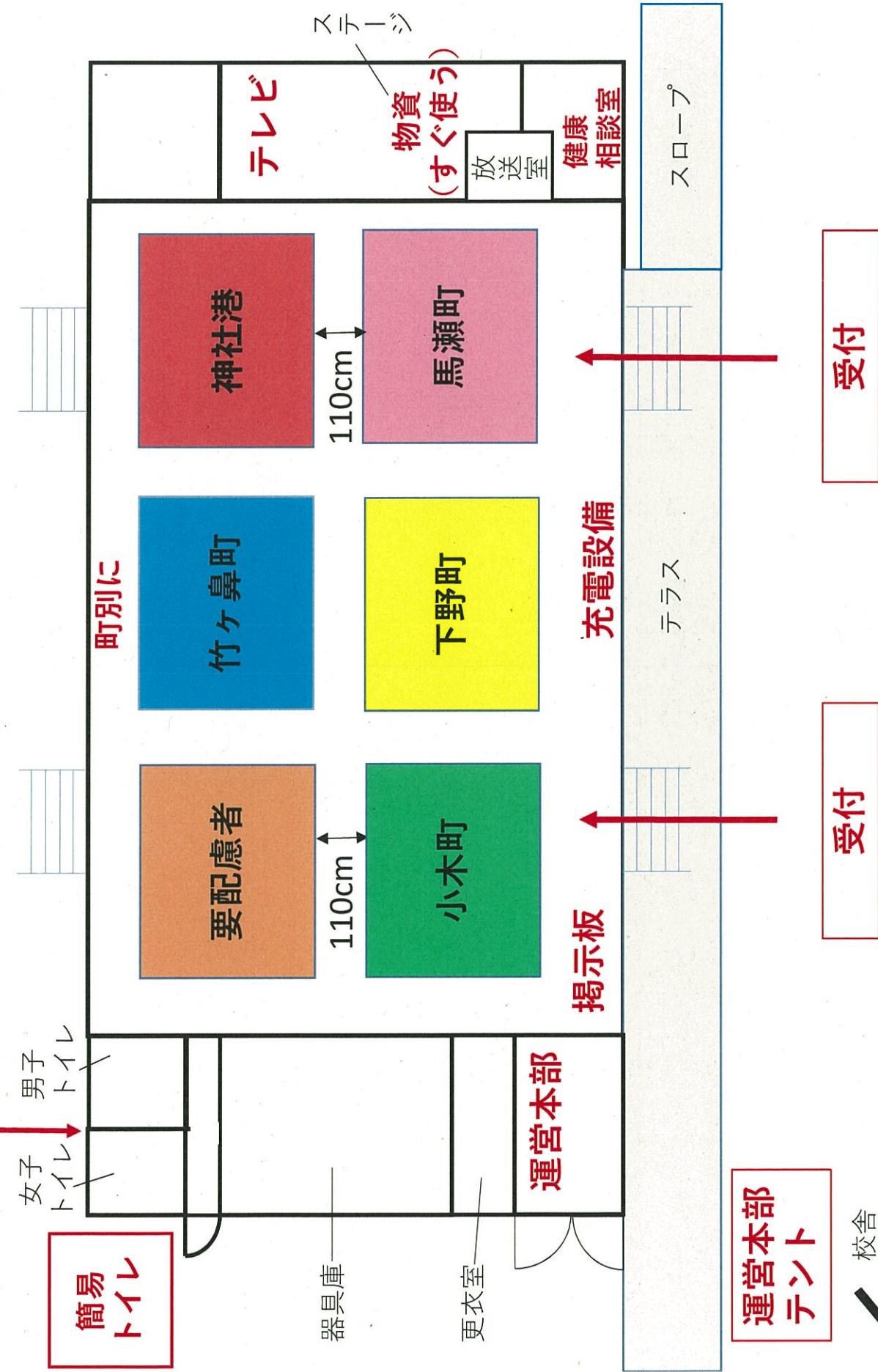
※2 協力可能事項：避難所運営で協力できることがあれば、下記の番号を記入してください。

- | | | | |
|-------------|---------------|--------------|----------|
| 1. 清掃活動 | 8. パソコンデータ入力 | 15. 通訳翻訳(語) | 22. 点訳 |
| 2. 炊き出し(調理) | 9. ホームページ、SNS | 16. 避難者の見守り | 23. 学習補助 |
| 3. 栄養士 | 10. 書類整理 | 17. 簡単な身体介助 | 24. 遊び相手 |
| 4. 物資配布 | 11. 会計 | 18. 介護 | 25. 保育士 |
| 5. DIY(大工) | 12. 記録(写真・動画) | 19. 看護 | 26. 教員 |
| 6. 電気工事 | 13. 車両誘導・整理 | 20. 手話 | 27. その他 |
| 7. 水道工事 | 14. 警備・パトロール | 21. 要約筆記 | () |

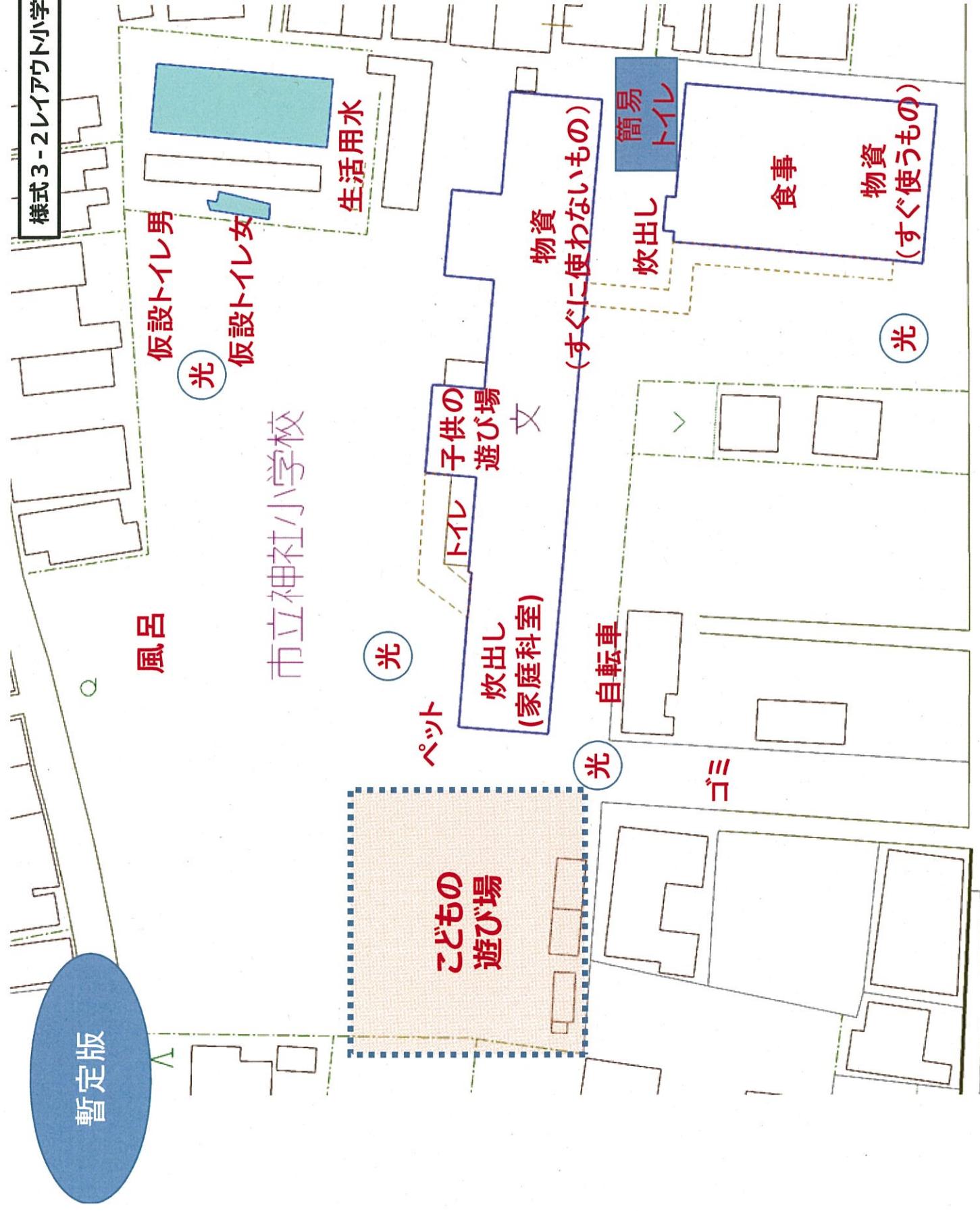
5 町配置図

2019.10 レイアウト (トイレ+)

常設トイレは凝固剤を用いて使用



様式3-2レイアウト小学校全景



学校
未許可

4F

音楽室		5 B		5 A		図書室		教育相談室	
男 w c	女 w c	音楽室	備品貯蔵室	読書室	英語室	図書室	英語室	教育相談室	E · R
備 品 貯 蔵 室	物 資	音楽室	備品貯蔵室	読書室	英語室	図書室	英語室	教育相談室	E · R

3F

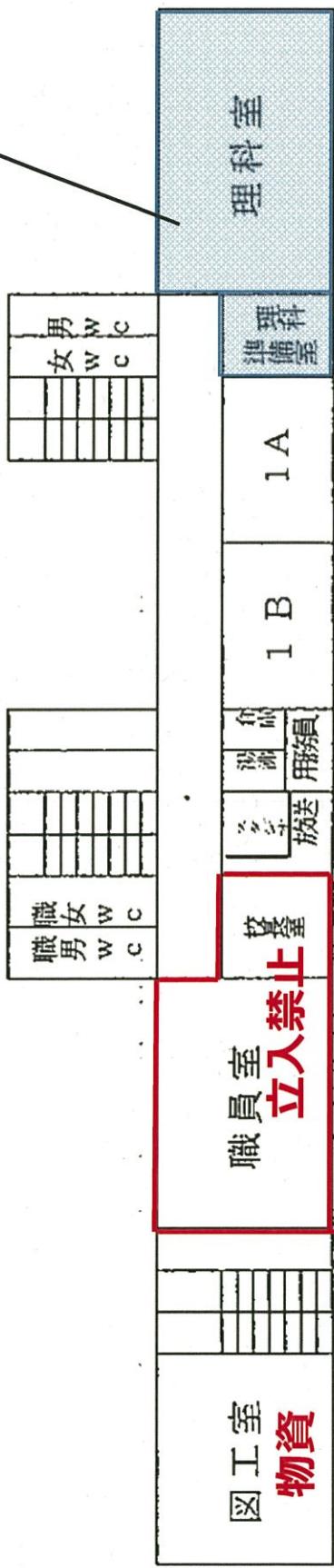
2 B		3 B		3 A		4 B		4 A	
男 w c	女 w c								
2 B	3 B	3 A	4 B	4 A	4 A	2 B	3 B	3 A	2 B

学校再開を考え、できるだけ普通教室は使わない。特別教室の開放を依頼する。

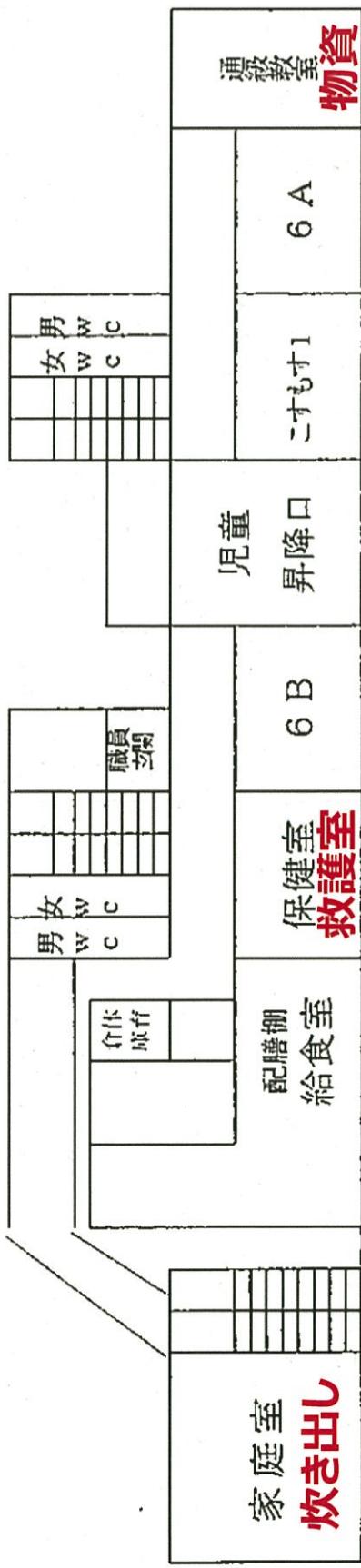
学校
未許可

薬品等で避けるべき?

2F



1F



学校再開を考え、できるだけ普通教室は使わない。特別教室の開放を依頼する。

伊勢市 神社地区

ぼうさい通信



2019年度の防災活動おさらい（神社地区防災訓練ほか）

5月16日 第1回 安心して住めるまちづくり委員会

6月1日 防災講演会

三重大学の川口准教授による
講演とクロスロードゲーム

『巨大災害に備える～地域で進める防災対策～』

神社小学校にて、ご講演と災害時に直面する問題解決を体験するクロスロードゲームを実施しました。災害時に強い地域になるためのヒントがたくさん詰まっていました。



6月27日 第2回 安心して住めるまちづくり委員会

7月18日 第3回 安心して住めるまちづくり委員会

7月19日 神社小学校5年生キャンプ

神社小学校の5年生キャンプにて、防災について知ってもらう時間を作りました。
「みんなの小学校が避難所になったら？」をテーマにいろいろな体験をしてもらいました。



防災授業

布担架体験

8月28日 第4回 安心して住めるまちづくり委員会

8月31日 神社小学校 防災授業

神社小学校の土曜授業の中で、4年生と6年の児童に対して、防災授業を行いました。
「みんなの小学校が避難所になったら？」をテーマにいろいろな体験をしてもらいました。



避難所環境体験

簡易トイレ体験

9月19日 第5回 安心して住めるまちづくり委員会

10月17日 第6回 安心して住めるまちづくり委員会

11月28日 第7回 安心して住めるまちづくり委員会

12月19日 第8回 安心して住めるまちづくり委員会

1月16日 第9回 安心して住めるまちづくり委員会

2月2日 神社地区防災訓練

昨年に引き続き「避難所を知り・体感する」をテーマに神社小学校にて防災訓練を実施しました。今年は伊勢市消防本部から最大35メートルまで到達するハシゴ車も参加し、多くの方に避難と避難所について体験し、考えてもらいました。



受付訓練



避難所収容訓練



夜間の簡易トイレ体験



ダンボールベッド体験



ハシゴ車は小学校の屋上よりも高い場所まで！

2月13日 第10回 安心して住めるまちづくり委員会

神社地区防災訓練のふり返りと、来年度のテーマを決めよう！

防災訓練のふり返りでは、簡易トイレを外に設置した訓練で現実味があった、非常持出袋の持参率が高くて良かったという良い意見の一方、夜間や災害時の空調など不安要素も残っているという話し合いがなされました。
それらの意見を踏まえて、来年度の防災活動テーマについて意見を出し合いました。



来年度の神社地区防災目標について

- ・みんなで参加！ひとりひとりが防災に向き合える地域へ
- ・体験を通じて、防災力を身につけよう！！

「子ども」に関する活動成果

Z-① 子供のかかわり方①「子どもへの配慮」

- 未成年・学生については避難所運営に協力を促すとともに、配慮も必要です。
- あらかじめ子供たちに協力して欲しい内容、任せられる役割を検討しておきましょう。
- 子供の心への負荷は大人以上です。状況に応じて子供の参画を呼びかけましょう。

1 子どもに配慮すべきこと

- 子供の遊び場、走り回れるスペース、勉強場所を確保する。
裏面「校舎レイアウト」参照
- ※ 子供のストレス発散、他の避難者とのトラブル回避のため、思いっきり遊びる場所を設定します。
- ※ 設定した場所においては、「うるさい・走る」等の大人の干渉を受けない場所として定義します。
- ※ 場所の管理については教員とも可能な限り協力して行います。
- 体育器具庫前のスペースを、子供の運動の場所として確保する。
※ 利用者が多い場合は、一日の中で時間を決めて学年ごとにスペースを割り当てる。
- ※ 緊急車両の出入り等を考慮して、必要があれば場所の再設定を検討する。
- ※ 避難所の車については、理解を求めて移動を促し、できるだけ広いスペース確保に努める。
- 図書室を読書、コンピューター室を勉強の場として確保する。
※ 要支援者が多数いる場合、教室をどう割り当てるかは運営会議の中で決定します。
- 物資の中の菓子類は子供に優先的に配布する。

2 保護者に依頼すること

- スペース運用前に保護者を集めてルールの確認をします。
※ 子供の安全配慮は各家庭で行います。
- ※ 子供どうして起きたトラブルは運営責任ではなく各家庭で解決してもらうようにします。
- ※ 避難者が多い場合は、保護者の仕事として子供の集まる場所の管理を任せても良い。
- ※ 守られない場合、子供用のスペースは撤去せざるを得なくなるかもしれない事を伝えておく。

3 こどもに手伝って欲しいこと

チック
 子供たちの精神状態に注意しながら、無理のない程度に手伝いをお願いしていきます。

○物資の配給 ⇒ 食事や支援物資の配給を手伝ってもらう
(分配や多く物資を欲しがる利用者に対しては必ず運営が対応すること)

○避難所全体への呼びかけ ⇒ 放送設備を使った朝の呼びかけ等
(原稿は運営が携わって、必要な情報を整理する必要がある)

○高齢者の散歩や運動の付き添い ⇒ 高齢者と一緒に外に出る
(トラブル・事故があれば必ず運営に連絡する係を作る。)

○通路や生活場所の掃除 ⇒ 必ず大人も高齢者も関わること
(不公平感をなくすために、避難者全員で行う仕事とする。)

作成中の避難所運営マニュアルの中に「子どもへの配慮」という項目を追加しました。



「防災訓練」アンケート集計結果

令和元年度「防災訓練」アンケート集計結果
2020. 2. 2 於: 神社小学校校舎墨上、体育館、グラウンド 9:00~12:00)

アンケート回収: 107件

住まい	神社港	竹ヶ鼻町	小木町	下野町	馬瀬町	計
	16	34	7	29	19	105

①あなたの世帯について教えてください

世帯構成	1人暮らし	夫婦2人	親子	2世帯	3世帯	その他	計
	11	38	39	16	2	1	107

年齢(人)

年齢(人)	~10歳	10~20歳	20~40歳	40~60歳	60~80歳	80歳以上	計
	5	26	42	63	135	15	286

性別(人)

性別(人)	男	女	計
	133	146	279

②避難所体験ブースはいかがでしたか?

項目	5	4	3	2	1	計
①避難所環境体験	67	20	14	1		102
②夜間トイレ訓練	53	25	21	1		100
③避難体験	57	32	7			96
④非常持出袋チェック	58	24	15	2		99

③もっと聞きたかった事や、感想などがあれば記入ください。(要約)

- 初参加ながら、役立つ情報が多くよかったです。次回もお願ひします。(4人)
- 判りやすく良かった、改めて、防災認識の機会となった。(3人)
- 実際に楽しく体験出来てよかったです。(2人)
- 毎年新しい体験、知識が得られ参加の意義を感じた。また防災意識を再確認した。
- 災害時の、点検、安全確認の重要性が良く分かった。家族に伝えたい。
- 色々な経験を積んで、急な出来事に活用できるようしたい。
- 高齢だと参加が大変ですが、頑張って今後も参加したい。
- はしご車に乗れてよかったです。安全ベルトもあり安心して乗れた(3人)

④今後の防災訓練について、ご意見があればお聞かせください。(要約)

- もっと参加者が増えるような取り組みを希望する。(2人)
- 参加者が少ない、もっと参加して欲しい。特に若い人に(2人)
- 季節を変えて、実施もよい。
- 学校が廃校になってしまって、防災倉庫は残してほしい。(段ボールベッドその他)
- 段ボールベッド、テントなど避難所の形態が種々が、どの方法にするか決めていないとの説明あり、ある程度想定して具体的に決めたらどうでしょうか?
- 夜間の訓練は、出来ませんか?
- 自宅からの避難を訓練に追加してはどうでしょうか?
- ドローンは利点が多い。活用方法を十分検討してください。

以上

※資料を詳しく見たい方は、まちづくり協議会事務局までご連絡ください

防災訓練活動成果

令和元年度防災訓練には約220名の方に参加して頂くことが出来ました。毎年1人でも参加者が増え、地域の防災力を高めることが当委員会の願いです。

アンケートで頂いた意見を基に、来年度も参加したくなる防災訓練を企画していきます！



来年度も、是非みなさん防災活動に参加してください！
委員長より

2020. 2. 4
田中敏伸

平成30年度、防災訓練アンケートの記述

参加者より

※もっと聞きたかった事、感想

<外ブース>

- ・解錠 Box の鍵は災害時にあわてて全て持つて行ってしまう人がいるのでは
別々の入れ物や Box に保管した方が良いのでは。解錠 Box を目立つ色にする
- ・外付け階段のサビが気になる。屋上から見て地域に高い所がない事に驚いた
- ・障害者は階段を昇れない
- ・屋上に上がってみてあらためて津波の時はここに来るしかないと思った
- ・外付け階段の手すりが子供や老人には高い
- ・防災倉庫は津波の影響のない場所に移すべき。備蓄の場所等が分かる地図を設置する。最初に来た人が分かるような表示をすべき
- ・倉庫に収納品表を表示する
- ・防災倉庫の食糧備蓄が何人で何日分か知りたかった
- ・防災倉庫の発電機やライトに優先順位を設定すべき
- ・担架を持ち上げるだけでなく、実際に運搬したかった
- ・毛布と棒で担架が簡単に作れることが知れて良かった
- ・備蓄について考えることが多いと感じた

<中ブース>

- ・ベッドとトイレの体験が良かった。トイレの事が心配だったが少し安心した
- ・寒い時が不安。実施の組み立てや作業訓練をしたかった
- ・体育館の収容人数を知りたい。5町が入ると入りきれないはず
- ・もっと具体的にすべき。体育館収容人数や防災機器の種類、使い方まで分からないと非常時に使えない
- ・ベッド・凝固剤は配給されるのか
- ・簡易ベッドは世帯ごとに与えてもらえるのか
- ・よく見えなかった。他のブースの声が大きかった
- ・体育館の床全体にひくマットやダンボールがあれば広く使えると思う
- ・避難スペースがいかに狭いか分かった
- ・足の悪い人にはダンボールベッドが良い。仕切りがあると全然違う

<その他・全体>

- ・発災時に落ち着いて行動できるか否か、今回の体験が大きなプラスになった
- ・説明の内容は良いが伝え方に工夫が欲しい。もう少し命の大切さにせまったく体

験をすべき

- ・どこに何がありどのように活用するか分かった。知らなかつたら命が助かる確率が減ったと思う。知らない事ばかりだった
- ・体験して発災時の覚悟が少しできた。訓練を増やしてほしい
- ・近くの避難所にこれだけの避難グッズがあると知れて安心した
- ・どこに何があるか確認できて良かった。もっと回数を重ねて身につけたい
- ・自分たちでも用意しておけるものがあると分かった
- ・大変さを感じた。年配の方が参加できないと思うので各町での取組が必要
- ・体験型で良かった。今までより参加者も増え、意識の高まりを感じる
- ・神社小学校が統合された後も避難所として校舎を残してほしい
- ・雨が降った時の訓練が必要
- ・一度では覚えきれないで定期的に開催してほしい
- ・ペットの事を聞けて安心した
- ・想定外への対応を考えておこうと思う
- ・勉強になったが、実災害時に行動できるか不安

※今後の防災活動について

- ・防災倉庫の場所は津波の場合使用できなくなるのではないか
- ・校長先生の早い対応が素晴らしかった
- ・歳をとった時に今のように避難できるか
- ・ベッドを夫婦で使ったらスペース確保ができるのか
- ・体験時間が短かったのが残念だった
- ・記念品のクッションが良かった、トイレ環境をもう少し改善できないか
- ・もっと多くの人に体験して欲しい
- ・川口先生の目標を持って訓練することの重要性が心に響いた
- ・日頃の有難み、防災の心構えが大切と感じた。防災グッズの点検をしたい。
- ・避難訓練もやりたい
- ・荷物を持って集まるべきではないか
- ・寒い時の訓練も良いが暑い夏の訓練もやりたい
- ・夜間の訓練をケガがないように実施したい
- ・外国人の対応を検討する必要がある
- ・準備品等あって当たり前という考えではなく日常生活の中で意識していることがたいせつだと感じた。
- ・緊急医療について知りたい

市民交流課より

H31.2.17 神社地区まちづくり協議会「避難所運営訓練」について

- ・地域の役員の皆さんが説明及び実演したことにより、地域のために努力されていることが住民に伝わり、より効果的な啓発につながっていた。
- ・体育館内のブースでの説明について、1列目の人はしゃがんでもらった方が良いなとか、模造紙をもっと高い位置で持った方が良いなど最初は感じたが、回数を重ねるごとに改善されていたと思う。
- ・避難所としての神社小学校の機能、備品をどのように使うか、どこにあるかを知ることができ、知識を得ることができた。
- ・具体的な想定（例えば、○月○日○時○分（季節や気温）、天気等）を設定して避難所運営訓練を行うのも良いのではないか。

令和元年度「防災訓練」アンケート集計結果

2020. 2. 2 於: 神社小学校校舎屋上、体育館、グラウンド 9:00~12:00)

2020. 2. 4
田中敏伸

アンケート回収: 107件

住まい	神社港	竹ヶ鼻町	小木町	下野町	馬瀬町	計
	16	34	7	29	19	• 105

①あなたの世帯について教えてください

世帯構成	1人暮らし	夫婦2人	親子	2世帯	3世帯	その他	計
	11	38	39	16	2	1	107

年齢 (人)	~10歳	10~20歳	20~40歳	40~60歳	60~80歳	80歳以上	計
	5	26	42	63	135	15	286

性別 (人)	男	女	
	133	146	279

②避難所体験ブースはいかがでしたか?

項目	良かった			悪かった			計
	5	4	3	2	1		
①避難所環境体験	67	20	14	1			102
②夜間トイレ訓練	53	25	21	1			100
③避難体験	57	32	7				96
④非常持出袋チェック	58	24	15		2		99

③もっと聞きたかった事や、感想などがあれば記入ください。(要約)

- ・初参加ながら、役立つ情報が多くよかったです。次回もお願いします。(4人)
- ・判りやすく良かった、改めて、防災認識の機会となった。(3人)
- ・実際に楽しく体験出来てよかったです。(2人)
- ・毎年新しい体験、知識が得られ参加の意義を感じた。また防災意識を再確認した。
- ・災害時の、点検、安全確認の重要性が良く分かった。家族に伝えたい。
- ・色々な経験を積んで、急な出来事に活用できるようにしたい。
- ・高齢だと参加が大変ですが、頑張って今後も参加したい
- ・はしご車に乗れてよかったです。安全ベルトもあり安心して乗れた(3人)
- ・説明者の声がよく聞こえなかった。マイクを使用してください。(3人)
- ・参加者少ない。もっと参加して欲しい。
- ・遠慮、忖度で体験が行き渡っていない。全員体験可能な体制を希望。

- ・防災グッズで、百均でも入手可能な物は、具体的に紹介して欲しい。
- ・長期(1週間、1か月)避難の、注意点も聞きたかった。
- ・避難所での優先事項(環境づくりor体調管理?)を知りたい。
- ・備蓄を十分にお願いします。
- ・体育館の床が冷たい次回は自分で準備したい。(折畳クッションなど)
- ・転倒防止金具の普及をお願いしたい。若い人の参加を希望。
- ・段ボール、非常持出袋の大切さを感じた。今一度中身を確認したい。

- ・夜間トイレ明かり(LED)が欲しい(7人)

- ・簡易トイレには、除菌シートが欲しい。

- ・非常階段の錆が気になった。腐食する前に点検、整備を希望。
- 2階以上浸水の場合の避難所はどこですか？その場合、備蓄品はどこにおくべきでしょうか？

・屋上へのカギBOX

- 物品一覧表が必要(鍵の員数が不明)
- 配置図はひも等で固定が必要(飛んでいく)
- 鍵にはNoを入れ、配置図と照合可能に

④今後の防災訓練について、ご意見があればお聞かせください。(要約)

- ・もっと参加者が増えるような取り組みを希望する。(2人)
- ・参加者が少ない、もっと参加して欲しい。特に若い人に(2人)
- ・季節を変えて、実施もよい。
- ・学校が廃校になっても、防災倉庫は残してほしい。(段ボールベッドその他)
- ・段ボールベッド、テントなど避難所の形態が種々が、どの方法にするか決めていいとの説明あり、ある程度想定して具体的に決めたらどうでしょうか？
- ・夜間の訓練は、出来ませんか？
- ・自宅からの避難を訓練に追加してはどうでしょうか？
- ・ドローンは利点が多い。活用方法を十分検討してください。

以 上

伊賀市・伊勢市連携協同プロジェクト

【相互乗り入れによる住民主体の避難所運営へのアプローチ（避難所体験訓練）】

プロジェクトにおける両市の取組テーマ

伊賀市：地域の防災意識の向上と主体的に継続した取組を図れるような仕組みづくり

伊勢市：避難所運営マニュアルの作成

伊賀市においては伊賀市総合防災訓練を活用して、住民に避難所運営について検討を促しながら防災訓練と一緒に実施することにした取組を実施。伊勢市においては、避難所運営マニュアルを作成し、決定した内容を防災訓練で実施することにした取組を実施した。

両市はどちらも【住民主体の避難所運営】という共通の課題があつたため、どのようにすれば地域が主体的に避難所運営できるようになるかを協同で検討していくと連携取組を行った。

まず、地域主体の避難所運営ができるようになるための一般的な年間プロセスを考えた。

- ・勉強会（講話等）の実施
- ・避難所運営検討委員会など組織の設置
- 【PDCA】
 - ・避難所運営マニュアルの作成
 - ・避難所運営図上訓練（HUG）の実施
 - ・避難所運営訓練（防災訓練）
 - ・反省会（マニュアルの修正等）

伊賀市において、このプロセスを1年の取組案として地域に提示したが、1年目、2年目とも、地域は当初から「できないと思う、難しい」という反応だった。（当然だと感じた。自分でもこの内容だと5・6年はかかるボリュームだと思う。）なので、伊賀市では1から何を地域はやりたいか（必要としているか）というゼロベースからの取組をはじめた。伊勢市においては、避難所運営マニュアルの作成の難易度を下げ、少しずつ積み上げていく方法でアプローチした。

それでも住民主体の避難所運営はかなりハードルが高いため、このハードルを下げるためにはどうすればよいかを中心に検討したが、その中で、簡単にできて住民に意識してもらいやすい方法として、避難所体験（訓練）がいいのではないかと考えた。

避難所体験訓練を実施する上で、気を付けた点は以下の2つである。

- ①避難所体験（スペース、トイレ、ダンボールベッドなど）をしてもらう
 - ②体験ブースでの説明は、住民（防災委員）が地域住民に対して行う
- この2点については一貫し、それ以外は地域と相談しながら内容を纏めていった。

1年目の伊賀市山田地区では、避難所体験よりも避難訓練に重点を置いた訓練にしたいという地域の要望に沿ったため実施できなかったが、伊勢市神社地区において避難所体験を実施した。

住民主体の避難所運営や防災活動を行う上で、講演や劇場型の訓練だけでは我が事と捉えにくく、地域の腹に落ちた形での浸透は難しいと考え、体験型の訓練を行ってみたが、訓練のふり返りでの住民の意見からも、実際に身体を動かす事で住民の知識だけでなく経験として蓄積されており、さらに、継続した活動へのハードルが低い手法であったと感じた。

2年目においては、さらなる取組のブラッシュアップを行った。

まず、伊勢市神社地区においては神社小学校と連携し、4～6年生の児童を対象とした授業の中で避難所体験を行った。防災訓練と内容は同一にしながらも、訓練での反省点を改善するための運営方法や時間配分の設定、児童に分かりやすい説明文となるような原稿作りを実施した。対象が児童ということもあり、体験前に「避難所が何のためにあり、どんな場所であるのか」をイメージしてもらうため、「防災クイズ」という形で学習の時間も設けた。

次に、伊賀市三田地区においては、リアルHUGと連動しながら実際に災害時におこり得る状況を劇で再現（伊賀市災害ボランティアセンターと連携）し、水木先生（有識者）の解説を交えながら参加住民に体験してもらう形で実施した。

最後に、伊勢市神社地区2年目の訓練において、夜間を想定するなどより現実に近いイメージをもつための新しい体験ブースも作成した。（詳しい体験ブース内容については、伊賀市・伊勢市の具体的な活動項目を参照）

この連携協同プロジェクトを実施していく中で、「地域住民から出た意見」を条件の異なる交流のない2地区において、反省を活かした活動に繋げていくことができた。他地区が行っていることを伝えることで、それぞれの防災に関わってくれた地区委員も納得し、改善点をさらに取り入れやすくなったのではないかと感じている。PDCAのサイクルという観点からも年に1回の訓練で修正と改善を行うよりも、多くの地区でベースとなる資料を共有することで1年のうちに何度も修正・改善のサイクルを回すことができたことも大きな取り組み成果であった。すでに令和2年度においての取組も進んでいる。伊賀市では、とある地区において、神社小で行った防災学習（避難所体験）を実施する方向で小学校と協議中である。伊勢市では神社小学校の4～6年生に加えて2年生にも防災体験を企画しており、去年と合わせると新入生以外は全員が体験授業を受けるよう企画している。今後も、両市で協力しながらさらなる取り組みを進めていきたいと思っている。

最後に、今回の取組では連携研究員が全体像を把握して提案を実施していたが、現状何の取組も行えていない地域においては自身の課題も把握できていないものである。そういった地域の課題を共に考え、最適な参考事例を提案していく役割をみえ防災・減災センターが担っていければ、地域の活動サイクルを何倍ものスピードで進めていける可能性があるのではないかと期待している。

伊賀市

伊勢市

【大きな目標】 住民主体の避難所運営

山田

何ができる（必要）
のか 1 から考える

HUG実施
『避難所運営、難しい』

まずは地域全地区での
避難訓練ができるように

避難 & 避難所受付訓練

- ・勉強会（講話等）
- ・避難所運営検討組織【PDCA】
- ・避難所運営M作成
- ・HUG
- ・避難所運営訓練
- ・反省会（M修正）

困難

避難所運営マニュアル
の作成（ただし毎年
A4 1 枚程度）

今年度は初動期をマ
ニュアルにする

マニュアルにした項目を
防災訓練で実施

【避難所体験】
知ることから始める
体験により体で感じる
ハードルは低い

【避難所体験訓練】の
実施

三田

何ができる（必要）
のか 1 から考える

まず避難所を体験して
みればいいのでは？

【避難所体験訓練 +
リアルHUG】の実施

神社小

5年防災キャンプ
4・6年土曜授業

お手伝い

新たにマニュアルにした項
目を防災訓練で実施

【避難所体験】の実施

お手伝い

【避難所体験（夜
間）訓練】の実施

某小学校
防災学習
(検討中)

1・2・3年生にも

他地域へ
の活用

さらなる進歩が？

災害VCと連携